

われわれの教育活動

2003年度総括と2004年度方針

25

2004年4月

一橋大学スポーツ科学研究室

われわれの教育活動

2003年度総括と2004年度方針

25

目次

はじめに	3
・われわれの教育活動をめぐる状況	4
1 . 大学をめぐる政策動向	4
2 . 本学の動向と運動文化科	6
・2003年度の教育活動の成果と課題	9
1 .カリキュラム編成と体制	9
2 . 2003年度の教育活動の成果と課題	11
(1)スポーツ方法	11
(2)スポーツ方法	16
(3)スポーツ科学・健康科学	18
(4)教養ゼミ	21
(5)学部講義・ゼミ	24
(6)大学院講義・ゼミ	29
3 . 教育条件の整備・拡充	32
・教育部活動	34
1 . 実践交流会	34
(1)新成績評価方法の検討	34
(2)学生はどのようなスポーツ方法の授業を求めているのか	38
2 . 教育活動日誌	41
3 . 調査活動	42
4 . 教育部の活動・体制	44
・2004年度教育活動の方針	45
1 . 2004年度の基本方針	45
2 . 教育活動	46
(1)2004年度のカリキュラム編成と体制	46
(2)カリキュラムおよび教育内容・方法の充実	47

3 . 教育条件の整備・拡充	48
4 . 運動施設利用に関する関係クラブ・サークルとの調整会議	49
5 . カリキュラム開発、教育方法改善のための調査・研究	49
6 . 教育部の活動	49
(1) 諸行事の開催	49
(2) 調査活動	49
(3) 資料・調査報告書・研究成果等の発行	49
(4) 2 0 0 4 年度教育部関係日程（案）	49

年間計画

資料 1 . 2 0 0 3 年度時間割

- 2 . 「スポーツ方法」「スポーツ方法」に関するアンケート調査用紙
- 3 . 「スポーツ方法」「スポーツ方法」に関するアンケート調査結果
- 4 . 実践報告・フラッグフットボールの授業（水口潔）

はじめに

国立大学の独立行政法人化が、この4月から現実のものとなる。

今回の法人化は、大学設置基準の「大綱化」を嚆矢とする「大学改革」の新たな段階を示すもの、ないしは新たな局面の具現化といってよいであろう。1991年以降、「大綱化」を受けて、全国の大学で教養教育の「改変」、「自由化」、教養部の改廃が実施されたことをはじめとして数多くの「改革」が全国の大学で着手された。また、21世紀を迎えて以後、「改革」は、「競争的環境における大学の個性の追求」と強く結びつくようになったといえる。

一橋大学の場合、「四年一貫教育」を軸とするカリキュラム改革、教官組織の面では学科目教官の各学部へのインテグレーション、そして、小平キャンパスの「老朽」施設の国立への「移転改築」(実質的には、国立キャンパスへの統合)などが時期を接して並行して進められた。また、それ以後の「改革」をランダムにあげてみても、「大学院重点化」、「COEプログラム」、「大学教育研究開発センター」の設置、「授業評価」や「成績評価」など、大学における組織、研究、教育のさまざまなレベルにおよんでいる。

このように振り返ってみると、1990年代以降の年月は、大学の「改革」という目標へ向かって走り続けた時間であったということができ、4月からの法人化を「改革」の「終着点」と見ることはできないであろう。

教育面から見るならば、法人化にともなって全学カリキュラム「改革」の議論とその具体化が早晩図られてくることが予測される。このことは「四年一貫カリキュラム」の「総括」と「見直し」という性格を必然的に持つてくるであろう。これに直結するものではないが、「全学共通教育とは何か」という議論は、すでに大学教育研究開発センターのプロジェクトや全学FDなどの場で議論され始めている。こうした情勢を視野に入れるならば、教養教育における運動文化(科目)の意義をこれまでの蓄積をふまえて検討すること、ならびに、「全学共通教育」の理念の検討とそこにおける運動文化(科目)の位置づけの検討をふたつながらにとらえていくこと、などが求められてくる。

こうした「未来の改革」と同時に、これまでの「改革」における「積み残し」の課題への取り組みも図っていく必要がある。

第一に、実技科目の基盤となる施設条件整備が十全ではなく、また大きな進展もないままである。今年度も、学長や副学長との懇談の機会をもち、施設整備の必要性についての執行部の理解を深める働きかけを行った。現時点では、財源問題などクリアすべき点も多く、整備進展の見通しは立っていないが、今後とも施設の整備・改善を図っていくことを要求すると同時に、学内の各方面に対して理解を得る努力を続ける必要がある。

第二に、授業のあり方や評価については、全学授業評価の実施、四段階評価から五段階評価への転換、「A評価のガイドライン」の設定、成績分布の公表など、多くの事柄が矢継ぎ早に実施に移されてきた。これらの事柄に共通する「教育の質の向上」という目的を是としながらも、授業現場の視点からこれらの事柄の検討をしていく必要がある。

われわれのエリアは、20年以上前から「われわれの教育活動」をまとめるなど運動文化の教育に関する集団的討議を継続して行ってきた。また、全学授業評価に先立って、学生による「スポーツ方法の授業評価」に取り組んできた。スポーツ方法の授業に対する学生の満足度はおおむね高いということができ、それは、われわれの教育活動への取り組みの一つの反映ととらえている。ただし、われわれはこうした結果に安住するのではなく、学生からの評価をさらなる高次の評価へとつなげていくために何が必要であるのかを問い続け、そのための集団的討議を続けていきたいと考えている。

学内各方面からのご批判、ご教示を切に望むものである。

．われわれの教育活動をめぐる状況

1．大学をめぐる政策動向

1998年10月の大学審議会答申で出された「21世紀の大学像と今後の改革方策について」の副題には「競争的環境の中で個性が輝く大学」とある。ここでのキーワードは「競争」と「個性」であり、その後、2001年6月の「大学（国立大学）の構造改革の方針 活力に富み国際競争力のある国公私立大学づくりの一環として」と「大学を基点とする日本経済活性化のための構造改革プラン - 大学が変わる、日本を変える - 」という小泉「構造改革」の中の政策によって具体的な改革が進められている。そして、現在、われわれ大学関係者は、「競争」における大学の「個性」化がどのような形で達成されていくのか、その具体的な方法を知ることとなった。

上記大学審答申において、今後の「大学は、それぞれの理念・目標に基づき」、「総合的な教養教育の提供を重視する大学」、「専門的な職業能力の育成に力点を置く大学」、「地域社会への生涯学習機会の提供に力を注ぐ大学」、「最先端の研究を志向する大学」、また、「学部中心の大学から大学院中心の大学など」「それぞれの目指す方向の中で多様化・個性化を図りつつ発展していくことが重要である」と述べられている。文部科学省は、段階的に「篩い」となる政策を設け、それぞれの大学が主体的に、それぞれの実情に即した形で「個性」化していくように導こうとしてきた。

まず、文部科学省は全国から「大学院大学」となる大学を募り、「大学院中心の大学」「学部中心の大学」などが振り分けられた（上記の軸による振り分け）。その後、「トップ30」として始まった「21世紀COEプログラム」では、「国際競争力のある世界最高水準の大学づくりの推進」が謳われ、上記「最先端の研究を志向する大学」が全国から選抜され、総研究費が数億円規模となる重点的研究予算が配分されている。2002年度から具体的な選抜がなされたこのプログラムは、実用化されやすい応用分野に偏ったセレクションがなされる傾向にあったが、2003年度も全採択件数133件中、医学系や工学系分野からの採択が多く、同一の傾向がみとれる（医学系 - 35件[26.3%]、数学・物理学・地球科学 - 24件[18.0%]、機械・土木・建築・その他工学 - 23件[17.3%]、社会科学 - 26件[19.5%]、学際・複合・新領域 - 25件[18.8%]）。

また、2003年度より開始された「特色ある大学教育支援プログラム」は、教育版の「COE」といわれるように、これもまた、全国から独自の教育に取り組む大学を選抜し、重点的に予算を講じていこうという施策である。今年度は、664件の申請があり、「主として総合的取組に関するテーマ」（16件：20%）、「主として教育課程の工夫改善に関するテーマ」（29件：36.3%）、「主として教育方法の工夫改善に関するテーマ」（14件：17.5%）、「主として学生の学習及び課外活動への支援の工夫改善に関するテーマ」（9件：11.3%）、「主として大学と地域・社会との連携の工夫改善に関するテーマ」（12件：15%）の5つのテーマに対して80件の採択がなされた。このプログラムは、上記答申による「総合的な教養教育の提供を重視する大学」、「専門的な職業能力の育成に力点を置く大学」、「地域社会への生涯学習機会の提供に力を注ぐ大学」の振り分け・養成に関連する具体的施策であろう。

さらに、特に「地域社会への生涯学習機会の提供に力を注ぐ大学」に関連して、2002年度

から開始された国立大学の「地域貢献特別支援事業」は、「自治体と国立大学との将来にわたる真のパートナーシップの確立」、「大学全体としての地域貢献の組織的・総合的な取組みの推進」をねらいとし、2003年度には、74件の申請を受け、26件の採択があった。

以上のように、文部科学省はここ数年でいくつもの「仕掛け」をつくって大学を篩にかけ、大学の「個性化」「多様化」を推進しようとしている。それらの「仕掛け」は非常に巧みに、大学審答申が示した「競争的環境の中で個性が輝く大学」という方向へと日本の大学を急速に導いているといえよう。そして、この4月から始まる国立大学の「法人化」は、そのような体制の確立を目指したものである。

法人化以降の財源は、国からの運営費交付金と学生納付金が主なものとなり、その他、国からの施設費補助金や「事業収入（受託研究等）」、自治体からの出資も含めた「寄付金」などが大学法人の収入として見込まれている。基本的財源財となる運営費交付金に関して、これまでは大幅には「削減されない」という説明がなされてきたが、2004年度以降の財務省方針では、毎年、マイナス係数を基準交付金にかけて削減を図っていくというものになっており、現在、国会で審議中である。このような方針が現実のものとなれば、大学間の生き残りを賭けた競争はより熾烈になり、各大学は財源のために学生募集人員を多くしたり、公的・私的な競争的環境からの教育・研究費予算の獲得、「寄付金」獲得のための企業や自治体とのパートナーシップの確立などに、これまで以上に躍起になっていくことが予測される。そのような競争構造の中では、それぞれの大学がもっている資産、資源といったものの自覚化が進み、現段階での「強み」を活かした方針が「戦略」として打ち出されるようになる。各国立大学の戦略、それが、昨年度からその制作に着手された「中期目標・中期計画」である。

文部科学省の説明によれば、「法人化」後の国立大学では、人事や予算などの面での自由裁量が広がるという。それにしたがうならば、各大学はそれぞれの「中期目標・中期計画」という「戦略」にしたがって、自由に自らの大学をデザインして、「個性」を「輝」かすことが可能になるであろう。しかしながら、昨年の7月に成立した国立大学法人法によれば、「中期目標・中期計画」は文部科学大臣がこれを定めるということになっている。したがって、実質的には大学の「個性」は文部科学省のコントロールを受けることになる。また、「法人化」以降も国立大学の主要な財源は当面国からの運営費交付金に頼らざるを得ず、それが「中期目標・中期計画」によって決められるのであるから、文部科学省の意向は非常に大きな影響力をもつことになる。さらに、上に示した「COE」や「特色ある大学教育プログラム」などは、そのセレクションこそ第三者機関（「日本学術振興会」や特別に設けられた選定委員会）に託されるものの、基本的には文部科学省がイニシアティブをとるプログラムである。とするならば、当然のことながら、その方針が強く反映されることになる。いずれにせよ、そこで求められる大学の「個性」は、あくまでも文部科学省のコントロールを受けたものであり、「学問の自由」や「大学の自治」という理念からは、離れていかざるを得ないということになる。

さて、では、本学はどのような「戦略」をとることになるのだろうか。本学のこれまでの取組みと2003年度の動向について振り返り、今後のわれわれの教育活動がおかれる状況について考えてみたい。

2. 本学の動向と運動文化科

いよいよ 2004 年度より、本学も一橋大学法人による運営が開始される。その運営指針となる「中期目標・中期計画」の作成は 2002 年の夏から各部局ごとに実施され、2003 年度の 9 月には全学的な「中期目標・中期計画(素案)」がまとめられ、文部科学省に提出された。これは中期(6年間:2004 年度~2009 年度)の教育・研究の理念的目標から具体的実施計画であり、また、内容も「教育の成果に関する目標・それを達成するための措置」「教育内容等に関する目標・それを達成するための措置」「教育の実施体制等に関する目標・それを達成するための措置」「学生への支援に関する目標・それを達成するための措置」「研究水準及び研究の成果等に関する目標・それを達成するための措置」「研究実施体制の整備に関する目標・それを達成するための措置」「社会との連携、国際交流等に関する目標・それを達成するための措置」の多岐に渡る。今後は、この 4 月に、「国立大学法人評価委員会の意見を徴し」た「中期目標・中期計画」が、文部科学大臣によって定められる予定である。ここでは、現時点での特徴点を示し、われわれの教育活動と関連する論点を指摘したい。

第一点目は、これまで一橋大学の特徴として「社会科学の総合大学」や「キャプテンズ・オブ・インダストリー」という言葉がしばしば使用されてきたが、それらの特徴を今後の本学の「強み」として位置づけ(「キャプテンズ・オブ・インダストリー」という言葉は学内議論の中ではざされたが)、大学院大学という新たなる形態の中で、より具体的に、より明確な形で「大学の基本的目標」に盛り込んでいるということがあげられよう。以下が文科省に提出された「大学の基本的目標」である。

「一橋大学は、市民社会の学である社会科学の総合大学として、日本におけるリベラルな政治経済社会の発展とその指導的、中核的担い手の育成に貢献してきた。人文科学を含む研究教育の水準はきわめて高く、創立以来、国内のみならず国際的に活躍する、多くの有為な人材を輩出している。この歴史と実績を踏まえ、21 世紀に求められる先端的社会科学の研究教育を積極的に推進し、その世界的拠点として日本アジア及び世界に共通する重要課題を理論的実践的に解決することを目指す。(下線引用者)」

そして、この目標を達成するための大学の「使命」として以下の事項を設定している。

(1) 新しい社会科学の探究と創造

- ・ 伝統的社会諸科学の深化と学際化及び教育研究組織の横断化
- ・ 言語・歴史・哲学・文学など人文諸科学や、4 大学連合における連携を中心とした自然科学的研究との協同
- ・ 研究環境・研究成果の国際的高度化

(2) 国内・国際社会への知的・実践的貢献

- ・ 実務及び政策への積極的な貢献

(3) 構想力ある専門人・理性ある革新者・指導力ある政治経済人の育成

- ・ 国際性と市民的公共性を備えた専門人教育の本格化
- ・ 教育の再編・高度化

この「大学の基本的目標」「使命」は、大学院大学としての目標、使命を再確認し、表明したものであるが、われわれが今後検討しなければならないのは、これらの目標の下にいかに関

文化科の教育を位置づけていくかということになる。その点で、次にみる「具体的な教育目標・措置」の特徴にも注目しなければならないであろう。

第二点目の特徴として、「中期目標・中期計画」が、新たなる教養教育と専門教育のあり方を検討し、それに則した形で具体的にカリキュラム改革を行っていくことを宣言しているという点があげられる。2004年度以降に具体化される学部・研究科・共通教育の再編・統合も含めたカリキュラム改革は、「中期目標・中期計画」によると、学部・研究科横断的な組織である「全学教育WG」が中心となって進められるということになっているが、運動文化科の教育のこれまでの成果を踏まえつつ、新たなる枠組みの中でそれを活かしたカリキュラム・体制を創っていかなければならない。「中期目標・中期計画」の「教育の成果に関する目標」には「教養ある市民、市民的公共性と国際性を備えた専門人や政治経済社会のリーダーを育成する」とあるが、そこに、スポーツ・運動文化はどのように貢献するのか、われわれの教育の根本の目標にかかわる問いを今後は継続的に行わなければならないであろう。

その点で第三に、学内措置として全学共通教育・教養教育の企画・運営を担ってきた「大学教育研究機構」から改編された「大学教育研究開発センター」が、教育面で学内全体の重要な役割を担う組織として位置づけられているのも、今回の「中期目標・中期計画」の特徴としてあげられる。「大学教育研究開発センター」は2003年度から文部科学省の認定を受けて設置されたのであるが、その使命として「中期目標・中期計画」には以下の3点が掲げられている。

(全学の)教育力向上のための教育システムの開発および教育活動評価のための研究開発を行う。

(全学の)教材開発、学習指導法に関する研究開発を行う(全学FDの主催など)。

全学共通教育の企画・運営及びその在り方の研究開発を行う。

第一点目は「教育活動の評価及び評価結果を質の改善につなげるため」の項にかかわる事項、第二点目は「教材開発・指導法の研究開発」にかかわる事項、第三点目が「全学共通教育の企画・運営」にかかわる事項である。法人化の一年前の2003年4月にこの「センター」は始動したのであるが、2003年度にも「センター」主催の「全学授業評価」「全学FD」が実施された。四年一貫教育導入後、旧「機構」は、共通教育・教養教育の企画・運営の役を中心に担ってきたが、全学的な任務を担った新「センター」は「教養教育」の中心的存在から全学の教育の中心的存在になったのである。この新「センター」を中心にした教育体制の下、「全学共通教育」の定義も含めた新たなる「教養教育」の教育カリキュラムの検討、模索がなされるのが2004年度となる。

以上、ここまでは「中期目標・中期計画」の特徴にそってわれわれの教育に関する論点を指摘してきたが、総じていえることは、2004年度がこれまで以上に本学における教養教育のあり方が問い直される1年になるということである。ここからはそれに関連して、2003年度のわれわれの教育にかかわる事項の特徴を指摘し、今後の見通しを述べていきたいと思う。

まず、2004年度のカリキュラム編成に着手する段階になって急遽浮上した、非常勤講師の財源カットの問題は、今後の教養教育見直しに大きく影響を与えることになるであろう。これは、2004年度の運営費交付金の申請にあたり、専任教員の数を実員ではなく定員で積算して報告したことにより、定員に満たない分は補充分として扱われ、例年度比にして50%減の予算が組まれてしまったという問題である。50%減の予算ではカリキュラム全体が破綻してしまうので、

今回は学内措置によって10%減のところまでどうにか工面されるということとなった。その後、それをコマ数で10%減らすのか、それぞれの講師の給料を10%減らすのかという議論が学内各部局でなされたが、最終的に、レーアプラン作成後であり必修枠の確保という問題もあるので、給料を一律10%カットするという方針となったのである。このような予算方針は2004年度以降も継続される見通しであり、非常勤の方々に多くの授業を担当していただいている共通教育・教養教育においては、そのような財政面からのプレッシャーからも、これまでの教育カリキュラムの枠組み・在り方を検討しなおすことが要請される。その点で2004年度のカリキュラム見直しの議論は、教育内容の議論だけではなく、受講生の人数、講義の形式をも含めた議論となることが見込まれるが、重要なのは教育の質をいかに維持・向上させるかという議論であり、財政面だけが優先されるような議論に決してしてはならないであろう。

また、2003年度の特徴点として、将来的にGPA制度へ移行することを目指して、新たなる評価制度が全学で導入されたということもあげておかねばならないであろう。具体的には、従来のA(優) B(良) C(可) D(不可)の四段階評価がA(優) B(良) C(達成されるべきレベル) D(到達すべきレベルには足りないが不可とはしない) F(不可)の五段階評価とされるという成績評価システムの改変である。さらにAに関しては、受講修了者全体の三分の一までとするというガイドラインも導入された。そして、それぞれの講義におけるABCDFの割合は、次の学期に公表されることにもなった。新評価制度は、達成されるべき標準レベルをクリアしない者に対しても単位を与えるという点や、従来通りの絶対評価でありながらAの割合を制限するという点など、やや複雑なシステムとなっているが、2004年度には、GPA導入の議論が本格化されていく中で、新制度の問題点が検討され、改良されていくであろうことが期待される。われわれ運動文化科でも、2003年度の実践交流会において新成績評価制度の検討を行ったり、年度末のアンケートによって非常勤の先生方から意見を聴取したりしたが、その中では、Aの割合を3分の1にとどめるというガイドラインへの批判が集まった。今後はわれわれの教育が何を目標にしているのか、そして、一般の講義科目に対して実技科目の成績評価はどう異なるのかなどの問題を検討する中で、スポーツ方法の授業に「ガイドライン」を適用すべきなのかという問い直しをしていく必要があるであろう。

2002年度の試用を経た「全学授業評価アンケート」が本格的に実施されたのも2003年度である。今年度の実践交流会では、この「全学授業評価アンケート」の検討も行った。そこでは、毎年われわれが独自に行っている「スポーツ方法アンケート」と「全学授業評価アンケート」の結果を比較分析し、われわれの知りたいことがら新しいアンケートで把握できるようになっているのか、そうでないならば、どのような質問の仕方をすればよいのかといったことが議論された。その議論の中で、講義形式の科目を前提に作成されている「全学授業評価アンケート」をそのまま実技科目である「スポーツ方法」の授業を評価する質問紙へと適応してよいのかという問題点の指摘があり、現段階としては、アンケートを複雑化して受講生に混乱を生じさせるよりは、これまでの「スポーツ方法アンケート」と「全学授業評価アンケート」の教官独自に設定できる項目にエリア全体で聞く項目を設けたりなどの工夫がされるべきであるとの見解が得られた。それを受けて、運動文化科では、今年度冬学期末の「全学授業評価アンケート」には独自の質問を加えて実施した。2004年度も引き続き、このアンケートの結果を検討し、われわれの授業の向上につながるような質問を工夫していかなければならないと考えてい

る。

さて、われわれの重要課題である体育施設の整備・充実についてだが、まず、日常の施設整備・管理については、2003年度7月から外部業者への業務委託により作業員が派遣されることになった。当初は、施設整備・管理の質の低下が懸念されたが、派遣された担当者の尽力により、憂慮されたような事態にはいたらなかった。ところが年度末になり、2004年度の委託業者の変更が明らかとなり、派遣される作業員も変わることが見込まれた。しかし、結局、担当者が所属会社を移るという形式で引き続き業務にあたるということになった。このことにより、2004年度に限って言えば、作業員の業務への習熟により、さらなる施設整備・管理の質の向上が期待されるのだが、委託業者の変更にともなって施設整備・管理の質が一定に保てなくなるとこのシステム(外部委託)の問題点は依然として残されたままである。したがって、われわれは、専門的人材の必要性を関係部署に引き続き要求していかねばならないと考えている。

また、長年の懸案となっている室内体育施設の充実に関しては、今年度も、目覚しい進展は図られなかった。この問題を学長と副学長へ直接要求する場を、今年度も設けたが、新体育館の建設については見通しが立たないままである。新体育館建設が無理ならば、現在の体育館の改修も含めた具体的代替案の検討をして欲しいと要請したが、この点では学長の要請により施設課が2案を検討した。しかしながら、現段階では、その2案での改修は構造的に困難であるとの見解である。他の代替案の提出も含め、今後も引き続き関係各部署へ新体育館の建設、現体育館の改修を要求していかねばならないであろう。2004年度からの法人化に伴い、この問題が永久に棚上げされるような事態にだけはしてはならないと考えている。

(岡本純也)

．2003年度の教育活動の成果と課題

1．カリキュラム編成と体制

<体制>

- ・専任教官8名
- ・尾崎助教授が、在外研究(オーストラリア)から戻った。上野教授が2003年度から引き続き5月まで在外研究だったため、夏学期は専任教官7名、冬学期は8名の体制で行った。
- ・非常勤講師は10名(前年度は11名)
- ・運動文化科目(教養教育)における専任の担当コマ数は24.0、非常勤担当コマ数は26.5で開講コマ数に占める割合は約52.2%(昨年度は54%)である。

<開講コマ数>

教養教育科目における運動文化関連科目の開講総コマ数は、通年コマに換算して50.5コマ

< 授業内容別開講コマ数 >

	2003 年度		2002 年度	
総開講コマ数	73.5	通年コマ	71	通年コマ
教養教育開講コマ	50.5	通年コマ	51	通年コマ
・方法 (療育コース)	32	(1)通年コマ	33	(1)通年コマ
・方法	24	半年コマ	23	半年コマ
・健康・スポーツ科学	8	半年コマ	8	半年コマ
・教養ゼミ	5	半年コマ	5	半年コマ
学部教育・大学院コマ	23	通年コマ	23	通年コマ
・学部講義	4	半年コマ	4	半年コマ
・学部ゼミ	11	通年コマ	12	通年コマ
・大学院講義	6	半年コマ	6	半年コマ
・大学院ゼミ	7	通年コマ	6	通年コマ

< 種目別開講コマ数 >

	スポーツ方法 = 通年		スポーツ方法 = 半年	
	2003 年度	(2002 年度)	2003 年度	(2002 年度)
テニス	9	8	7	6
バスケットボール	2	2	2	2
バドミントン	3	4	3	4
サッカー	6	5	2	2
バレーボール	4	4	1	1
軟式野球	1	2	-	1
ソフトボール	1	2	-	-
卓球	0	-	1	1
ジャズダンス	1	1	2	2
フライングディスク	1	1	2	1
スポーツフィットネス	1	1	-	-
剣道	1	1	-	-
フラッグフットボール	1	1	-	-
陸上	-	-	1	1
器械体操	-	-	1	-
ゴルフ	-	-	2	2
ヨガ	-	-	-	-
療育コース	1	1	-	-
合計	32	33	24	23

2 . 2003 年度の教育活動の成果と課題

(1) スポーツ方法

スポーツ方法 は、「基礎的な体力と、スポーツ方法についての基礎的能力(技術認識、練習方法、技術習得) などの養成」(『学生便覧 2003』) を目的としている。また、スポーツとは「自己実現やコミュニケーション、人間らしい生き方の追求と深く関わる文化」であるととらえており、授業では運動技術に関わるだけでなく、他者とのコミュニケーションの構築(学生同士、学生と教員など) も重要な目的となっているといえよう。このような授業の目的をふまえ、以下では、「授業担当者アンケート」(2004 年 1 月末実施) にもとづき、2003 年度の教育活動について報告する。

グループ学習の指導をめぐる状況

ほとんどのスポーツ方法 の授業では、グループを編成し、経験者、未経験者を織り交ぜた異質集団のなかで相互に学習するグループ学習が中心となっている。学生の感想(アンケート自由記述) から、「仲間」や「友だち」などとのふれあいの中で、その種目の上達や愛着などがみられることから、コミュニケーションという点だけではなく、技能の習得という点でもグループ学習は重要な位置を占めているといえる。他方で、そのために、いかにグループを編成するか、また活動を円滑にするのが授業を左右しかねない。アンケートでは、受講生の学部による偏りや男女の偏り、初心者への配慮についての言及がみられた(ちなみに、学生アンケートによると授業の満足度に関して男女差はほとんど示されていない。調査活動参照)。

「学部による受講生の偏りが著しい。学部必修科目のせいかな? これでは、学部の壁を乗り越えて学習・交流の機会を設ける、という開設の趣旨からほど遠い状態になってしまっている」(高津)

「女子が 3 名受講し、特にそのうちの 1 人は全くの初心であったために、班内では男子が配慮してくれたものの、本人にとってはいろいろと気後れ、気疲れしたようである。モンゴルからの留学生が 1 名受講した。野球系はこれまで見たこともないと言う。しかし、見よう見まねで、適応した」(内海・ソフトボール)

授業の目標設定、進め方をめぐる取り組み

では、そのような異質集団によるグループ学習において、今年度はどのような取り組みがみられたのであろうか。

学生からのアンケートでもみられたことだが、メンバーが常時出席していることが練習計画等を円滑に進める要件であり、そのことがクラス全体の進行状況にも影響していることがわかる。また、グループは一年間変更することがないことがほとんどであったが、昨年度は半期ごとに編成し直すなどの試みもみられた。その方向での模索もみられるが、鬼丸・テニスの授業にみられるようにグループでの取り組みについて指導をすることで、グループごとの「コミュニケーションの質の差」をサポートする方向を見いだした授業もある。

また、教材については、屋外種目にとって雨天時の授業は単なる「外の代わり」と位置づけられがちであったが、近年の AV 教材等の充実を背景に、より積極的に位置づける授業もみられる。理論と実践の結びつきは学生アンケートからも要望があるものであり、実技においても

多様な教材を駆使することにより、より充実した授業が求められているといえる。

今年度初めての試みとしては、TAの採用があった。全学的にTA採用は推進の方向にあるが、実技授業においてTAがどのような役割や意義を持ちうるか等(TA自身[院生]にとっても)今後の検討課題となるであろう。

「座学」を重視するスポーツフィットネスの試みも定着しつつあるのではないだろうか。講義(テキスト:柄本三代子著『健康の語られ方』)と身体測定を組み合わせ、学生にも身近で日常的な「健康法」「ダイエット」といった観点から、自己と身体を客観的に洞察する試みであるといってもよいだろう。

また、昨年度指摘されていたが、ポルスター氏による授業は、学生にとってスポーツを通して英語、ドイツ語といった外国語によるコミュニケーションの機会をもたらしてもいる。近年、授業の多様な形態が模索されている中で、ポルスター氏も記すように新たなスポーツ方法の授業の一つとしてその成果を検討することも必要となってくるだろう(ただし、学生アンケートのいくつかにみられたように、日本語によるコミュニケーションを求める学生との相互理解についても考える必要がある。また留学生とのコミュニケーションについても同様の指摘[新村]がある)。

以下、大まかな項目に分けてアンケート部分を記す。

)グループ学習に関して

「冬学期のグループ替えについては意見が2分された。今後の検討課題である」(内海・ソフトボール)

「出席状況も全般的に良好であり、グループごとの活動も学生相互のコミュニケーションが図られ、うまくいったものと思われる。こうしたグループの状態が、練習や試合の上でプラスに作用したといえる。とくに、経験者の学生は、初心者、初級者にたいする『アドバイザー』として動いてくれた。」(尾崎・テニス)

「本年は、練習後のミーティングの時間を強制的に確保し、ミーティングの間は一箇所に集まり、コート整備などしない、ミーティングの間は一人一人必ず発言し、それを全員が聞き、最後にリーダーが総括する、という基本的なことを徹底させてみた。その効果ははっきりとは掴めていないが、授業にメリハリや落ち着きが出てきたように思える」(鬼丸・テニス)

「今年は、グループ編成を工夫した(夏学期と冬学期に編成替えをした)。冬学期当初、学生は不満そうだったが、通年やった後の評価は好意的。その理由は、より多くの友達ができたと、いうもの。異質グループによる編成についても、ほぼすべての者が好意を示した。熟練者と未熟練者が同じグループで練習するほうが、ともにうまくなる、というもの。熟練者も、クラブやサークルと授業は違うということで、賛意を表していた。熟練者による指導を2コマ、セットしたことも、彼らの指導者意識を高める方向で、いいように機能したように思う」(高津・テニス)

「今年は、夏学期、ミニゲーム主体。冬学期11人制を基本にし、夏と冬でグループを再編成した。サッカーの場合、1グループの人数が多いこと、グラウンドが広大で開放的であり、その分、集中しにくいなどの難点がある。リーダーの負担も大きく、そうしたことへの指導上の配慮も必要だろう。FW、MF、BKの3パートに分けて責任者をもうけ、彼らをグループ作りにかかわらせようとしたが、うまく機能しなかった。夏のグループと冬のグループの関連性を工夫する必要

がある」(高津・サッカー)

「グループノートの様式もより詳しく練習内容や戦略が書き込めるようにし、授業前に担当者が提出するように義務づけた。このことにより、今年度の受講生は、アルティメットの戦略、それを実行するためにはどのような練習をすればよいかなどの学習が例年よりも進んだと評価できる」(岡本・フライングディスク)

__) 教材に関して

「学生の感想文でも、野球系の教材解釈に賛意を示す者が多かった。つまり、守備位置を1回ごとにローテートして、すべての者が9インニングで、必ずすべてのポジションを経験するものである。賛意の理由として、授業とクラブの識別がしっかりとなされ、上手な者もそうでない者も共に同じ経験をしながら、全体としていかに上達するか、そのことを通して野球を知り、好きになるかということである。これは、初心者とクラブ経験者に強い傾向が感じられた」(内海・ソフトボール)

「雨天時は、昔のワールドカップのゲームを見て、現在の戦術との比較をしたり、欧州のクラブスポーツの現状についてのビデオを見たりして、サッカーに関する知識を、社会的な視野も含めて広げるように努力した」(高津・サッカー)

「雨天時にテニスの歴史とダブルスの試合に関するビデオ鑑賞したが、歴史に関してはかなり興味を示した。特に服装の変化では時代を反映した文化として、また技術面ではラケットの変化に伴う球の速さとゲーム展開について、テニスのイメージをふくらませたようだ」(早川・テニス)

「今年度から、グループノートと一緒にフライングディスクのテキストとCD-ROMも貸し出すようにした」(岡本・フライングディスク)

__) TAおよびスポーツフィットネスの試み、英語コミュニケーションを用いた試み

「授業準備だけでなく、受講生と同世代ということが有効に作用し、全体の雰囲気や和らげたように思われる。ただ、はじめてのことだけに、どんなことを課したらいいのか十分な検討もないまま、教育実習生を受け入れたような対応になってしまったこともあり、TAそのものの位置づけ方をもっと事前に練っておかなかったことが反省点となった」(早川・テニス)

「夏学期には、体力測定、安静時と運動時の心拍や血圧の変化の測定などの実習型授業とスポーツを実践する授業を行った。冬学期には、受講生の興味のある健康法やトレーニング法をあげてもらい、グループごとにそれを検討するグループワークを行った。また、1年間を通して、授業の始めに体重、体脂肪率、血圧、安静時心拍を測定し、1年間を通じた自己の身体の変化が見てとれるように記録させた。最終レポートでは、グループレポート(グループワークの成果)と個人のレポート(1年間の身体データの図表化とそこから読みとれる自己の身体の変化)を提出させた」(岡本・スポーツフィットネス)

「Compared to classes in previous years, I realized that students tend to communicate more and more in English. Although I use Japanese as basic language of teaching, individual communication from students to me has been done in English mostly; sometimes even in German. Students want to take the chance of practicing their language skills with foreign teachers. 」

「As my honorable friend and teacher of Hitotsubashi University Prof. Kunihiro Karaki always said: Sport is an important field of communication. The experience of practicing sports and communicating in a foreign language is very valuable for Japanese students. Small practical tests should be a part of evaluating students. The results give them more objective understanding of their own sports abilities. Students should understand that sport is not just playing. Practicing sports is valuable for body and mind issues.」(ポルスター)

次年度へ向けての取り組み

本年度は、全学的に学生による授業評価アンケートの導入が行われた。少人数授業やゼミなどは対象外とはいえ、スポーツ方法の授業は例外ではない。それに加え、評価基準についても5段階評価が本格的に導入された。担当者による感想にもあるように、学生の側が「評価すること」「評価されること」に関して敏感になっているという側面もみられる。授業評価および評価基準の5段階化についての意見・感想については、常勤、非常勤を問わず個々の教員から様々に出されており、どのように授業に有効に反映させていくのか、あるいはその問題点についても、今後検討していくことが必要となっている。

他方で、学生による授業評価、担当者による自己評価について運動文化エリアにおいては、長い実績があり、これらの実績をふまえ、また全学的な動向も探りつつ、今後の授業に生かすことが重要である。従来の評価材料(出席、グループ学習、レポート、小テストなど)を大きく変えたとした授業はないが、それぞれの基準をより細分化し、厳密化した、あるいは今後厳密化の方向で考えているという授業が多く見られた。

さらに、そのような「評価慣れ」しつつある学生に対しても、有機的な関係を構築しつつ、興味を引き出す授業実践への新たな試みについても、記述はみられる。

また、実技授業であるがゆえに、学生の出席率はいっそう授業の充実と強く結びついている。欠席だけでなく遅刻者をいかに減らすかも重要な案件である。全体としては時限などに関係なく遅刻、欠席が多いという指摘がある一方で(青沼、新村)方法 に関しては「ほとんどない」(尾崎、早川)という授業もあった。他方で、下記のように「突然来なくなる学生」に対する対処も、今後必要となると考えられる。学生アンケートからもわかるように、スポーツ方法の授業では学生同士だけではなく教員との個人的な接触の度合いも高く、より親密な関係が築けるという部分も学生にとっては評価の高い要素であるといえる。グループワークが中心となることで、お互いが励まし合って遅刻、欠席を防いだという例は恒例といえるであろう。それに加え、近年学生へのメンタル面での援助の必要が増しており、とりわけ一年時においてコミュニケーションが重要となる方法 の役割は小さくない。保健管理センターと従来どおり連携をとっていくことが重要であろう。

しかし、このようなさまざまな授業充実への試み、努力も施設、機材等の設備条件によってままならない状況は、アンケートからも十分読み取れる。エリア単独での改善には限界もあり、これらの充足が早急に望まれる。

____) 来年度に向けて新たな取り組み

「やはりアルティメットばかりだと女子にはきつすぎるように思われる。来年度には、『アキュラシー』や『ダブルディスクコート』などの種目を取り入れていきたい」(岡本・フライングディスク)

「初心者がリーダーとなって練習計画を立案するとき、どうしても以前の練習の踏襲になってしまいがちであるが、本年はビデオで示す以外それに対する有効なサポートができなかった。来年度から初心者が参考にできる練習方法のパターンを個別に示していきたいと考えている」(鬼丸・テニス)

__) 履修指導

「グループの仲間が遅刻・欠席しないようお互い連絡しあい、朝携帯で目覚ましコールするなどの友情あふれる行為が、とくに冬学期に顕著であったことも見逃せない。その甲斐あってか、欠席0は6名、1回欠席7名、2～3回欠席5名、早い段階でドロップアウトした2名を除いて二桁欠席者なしであった。」(早川)

「一方、ずっと出席していたのに、突然に来なくなってしまいう受講生が今年もいた。気がつくとう欠席が続いているという状況であった。同じ時間の受講生に、休んでいる者に出てくるように伝えてくれとは言ったのだが、何の解決にもならなかった。大学不登校者の問題に対する制度的ケアがなされないままの現状にあって、来年度からは、普段から気を付け、休みが続いた学生にこちらから連絡してみようと考えている。出席表に積算欠席数を毎回記入するようにすれば、気づきやすくなるだろう」(岡本)

「『顔と名前が一致する』ことは学生にとってはうれしいことのように。レポートで、わざわざ言及した学生が、3、4名」(尾崎)

__) 施設条件に関して

「療育コースの場合、サーキットトレーニングを組み立てようとする場合、関連の器具が少ないためメニューを限定せざるを得ない。今年度、新たにダーツのボードを購入したが、これまでと違って「正式」な器具となって、学生たちのモチベーションの向上にもつながったと思われる」(尾崎)

「3時限目に適当な教室が空いてなくて、雨天時にこちらの用意したVTRが見せられなかったのは少し残念でした」(柴崎)

「昨年度、フライングディスク(, ともに)の授業の場はホッケー場から陸上競技場へと移動した。土のグラウンドと草地のグラウンドとではプレー自体が変わってくるので、今後も陸上競技場でずっと行いたい」(岡本・フライングディスク)

__) 成績評価等

「やはり授業はじめのオリエンテーションで評価方法を含めた詳しい説明が必要。今年度の方法を再度検討し、次年度でそれを学生らに伝えることにしている」(早川)

「自分の中で大きく変化したのは、出席率の問題で、最低出席率70%以上という規定はとも角、欠席が多い、少ないは直接評価基準とはせず、あくまでもオリエンテーション時に提起した事柄に対する理解度、意識度から、グループノートへの参画、配布したプリント、VTRによる問題

提起等に対する理解度、意識度、そこからの取り組みへの相違・工夫、技術的達成度、認識の変化、他者との関係等を、日常の実践とレポートにおける整合性から評価した」(新村)

「個々人の成績評価についても、出席点を重視し、レポートを加味するのは合理的であるとする意見が多かった。学生たちは、必ずしも実技点を強く要求しているわけではないようである。」(内海)

療育コース

【尾崎】 受講生：夏学期 2 名、冬学期 3 名

「例年通り少人数であるし、またこの授業の趣旨から、個々の身体状況に応じて授業のメニューを組んでいった。最終的には、3名の身体状況を総合して、「ストレッチ サークット・トレーニング(メニューは個別) ダーツ」という流れとなった。授業中、学生との会話の時間をとって、身体状況を随時把握すると同時に、学生生活等について話し合いを行った(「カウンセリング」とまではいえないにしても、学生から直接話を聞くことの意味は小さくないと判断したため)。学生のパーソナリティにもよるが、3名受講していたことで、例年よりは「にぎやか」な感じで進めることができた」

(坂 なつこ)

(2) スポーツ方法

受講生の心情・傾向

「スポーツ方法 はどうしても任意の授業といったイメージがもたれ、やりたいときに参加する、という意識がなぜか形成されつつある。」(早川)とする指摘がある。それは後述の雨天時の出席者激減、途中下車の多さなどとも関連するかも知れない。「1単位」という制約に不満を表明する学生は今年度はあまり目立たなかったが、それはあきらめかどうかは不明である。もっとも、最初から単位目当てではなく、「その種目がやりたいから」受講する学生も多いと考えられる。

また、「経済と法が多い。同じ顔ぶれの、常連客も多い。」(高津)と、カリキュラムの関係で、履修生の学部にも偏りも生じている。「抽選にもかかわらず初回でこなくなる学生などが多く、またメンバーが固定せず、2チームのバランスをとるのに苦労した時が多々あった。今後何らかの対策が必要であると思う。」(坂)という実態もある。

授業の方法と雰囲気

授業は各種目の経験者が多いためか、技術的には高く、学生間の雰囲気もよく、経験者がリードをしてくれた。只、この場合、2つの側面が感じられる。1つは自己展開による学生間の教え合いも比較的積極的になされるが、一方ではその独自展開故に、教師側の指導が入りきらないという側面をどう考えるかという点である。また、初心者が適応しにくく、その結果、途中で受講をやめてしまう実態(25%、サッカー、高津)も少し気になるところである。「サークル経験者が多く、サークル中心のコミュニケーション・ルートも存在するらしい。その分、そうしたネットワークからはずれた者はとっつきにくいかもしれない。受講者も楽しい、上手くなる授業を経験したと思う。まったくの素人が2名いたが、彼(彼女)は、最初教師がついて指導していたが、途中で来なくなった。」(高津)「レベルが一挙に上がってしまうので、それについていけないと感じた者が授業に出てこなくなるという傾向があるように思われる。」(岡本)

「経験者と未経験者、あるいは経験者同士でもルールをどこまで適用するかで、調節が必要な場面があった。今後はルールやゲーム運営に関しての合意の形成や、未経験者が疎外感を抱かないように指導することが課題となった。(バスケットボール、坂)

以上のような、上級者と組むことによる初心者の心情と実態が多く指摘された。と同時に、逆の立場も指摘されている。「初・中級レベルの者にとって上級者との対戦ないしはペアーを組むことで新たな発見が多かったとレポートしている。しかし上級者は、『毎回初・中級者と対応するのではどうしてもいい加減なストロークになってしまい、集中したテニスが出来なかった』と自己発展に結びつかなかったことを報告している。この問題はなかなか核心をついており、授業者としての対応が迫られる。コートごとにレベル分けすべきかどうかの決断である。相互学習を最も基本に置きながらもその方法は多様にあり、もう少しいろいろな方法を試みながら全体の目標が達成できるようにしていかないと、マンネリ化した授業に陥ってしまう。要自戒。」(早川)

また、「一応、講義要綱には、初心者・初級者対象の授業と掲載させてもらっているのだが、ここ数年上級者の受講が増加しており、本年は3分の2以上が上級者で初心者はわずか2人だった(選考の時の状況がわからないのでコメントのしようがないのだが、できれば初心者優先で初心者がいっぱいにならなかった場合にのみ、上級者を受け入れるという訳にはいかないだろうか。)(テニス、鬼丸)等の指摘もあり、検討を要する。

いずれにせよ、現在の学生は人間関係の弱さも手伝って、集団に適應できないと止めるという側面も考えられ、その点を意識しつつ、グループ形成と指導にも大きな注意が求められる。

サークルの学生と指導

「サークルの学生(受講者の8割以上)と一緒にプレーをすること、試合をすることへの初心者、初級者の「気後れ」の気持ちを、どう「ほぐす」かについて意識した。」(テニス、尾崎)という表現に見られるように、最近、ゼミ単位やサークル単位の受講が増していると指摘された。この場合、うまく行けばよいが、時には授業の狙いとは外れて独自に展開しないとも限らない。その場合、先のような事態も発生する。学生の受講行動を促進させながらも、今後、こうした問題にもよりいっそう対応する必要性に迫られるかも知れない。

雨天時対策

外種目の雨天時は、出席が激減することも共通していることである。これは 述べたような方法 の授業観によるところも大きいと考えられる。受講生の多くは、「1単位」を取りに来るといふよりもむしろ、その授業内容に惹かれてきている傾向もあり、「彼らを雨天でも来させるためには、いい映像を流せる施設・設備とソフトが不可欠だろう。」(高津)という自覚が必須である。

新種目の開発

受講生を増やすためには、学生の要求の強い種目を増やしたり、新規種目を開発したりして学生の要求、関心の掘り起こしの作業を続けることも必要である。

施設

「室内でのバレーボールを望む声が大きかった。」(内海)ことを典型として、とにかく大体育館の欠如が、学生の授業選択、態度、指導の方法にも大きな影響をもたらしている。早急な新体育館建設が望まれる。(内海和雄)

(3) スポーツ科学・健康科学

< 概要 >

本年度開講したスポーツ科学・健康科学の講義は、下記の一覧表に示すとおりである。本年度の受講生総数は2,532名。昨年度の総数が2,546名だから、大きな変動はない。個々の授業の履修者数についても、「スポーツと映像文化」が130名、「現代スポーツ論」が143名増加したことを除けば、昨年度とほぼ同じ傾向にある。自由な選択制度のもとで積み上げてきた実績、とでもいえようか。履修動向は定着しているといえる。ただし、「ヒューマンセクソロジー」2コマと「スポーツと映像文化」1コマ、「現代スポーツ論」1コマ、計4コマで履修者総数の84%を吸収しており、その意味では、履修者数のアンバランスが著しい。このビッグ4がスポーツ科学・健康科学の履修動向を決定づけているといえよう。

開講講義数については、今年度は「スポーツトレーニング論」(昨年度履修者数418名)を開講しなかった。ただし「地域社会とスポーツ」が復活したことにより、コマ数に変動はなかった。

：2003年夏学期

講義名	担当者	曜日	時限	登録者数
ヒューマンセクソロジー	村瀬幸浩	火	2	444
スポーツと権利	内海和雄	火	3	99
現代社会とスポーツ	岡本純也	水	2	66
地域社会とスポーツ	尾崎正峰	木	3	139

748

：2003年冬学期

ヒューマンセクソロジー	村瀬幸浩	火	2	426
運動と体力の科学	渡辺雅之	木	2	97
スポーツと映像文化	鬼丸正明	木	3	824
現代スポーツ論	坂 なつこ	金	4	437

1784

夏+冬	2532
-----	------

つぎに、教育部が実施した年度末アンケートをもとに、「スポーツと権利」「現代社会とスポーツ」「現代スポーツ論」の共通点を抽出しておこう。第1に共通することは、今日のスポーツ動向をめぐるトピックを抽出し、学生の問題関心に依拠しながら授業内容を構成し、社会科学的な認識を培おうとしていることである。第2は、視聴覚教材や配布資料の利用に工夫を凝らし、学生の関心を高めようと努力していることである。そのほか、個別には、プロ野球選手会の顧問弁護士による講義を加え、学生にリアルな実態を聴かせたり、あるいは、スポーツ方法の受講者が多いこと着目し、実技としてのスポーツと社会科学としてのスポーツを意識的に結びつけようとするなど、斬新な試みもなされている。

とはいえ、重複する授業内容も多い。上述の履修動向をも勘案した場合、各授業間の系統性

や多様なメニューという点で、この講義群の創設趣旨とは異なる状況にあるといえる。もともと、スポーツ科学・健康科学は副専攻型の履修システムを想定しながら構想されたものであった。いま、あらためて、各講義間の関係や学部教育との差異、および、両者の新しい関連づけについて検討する時期にきているのかもしれない。その場合、本年度休講措置をとった「スポーツトレーニング論」をも含め、狭義の「スポーツ科学」の位置づけについて、再検討が必要になろう。また、履修者数が400名を越える授業については、教員の負担や教室の収容人員等を配慮し、その実情について共通の認識を深める必要がある。

本年度は、学生による授業評価が本格的に開始された年であった。夏学期に実施した学生の授業評価アンケートによると、スポーツ科学・健康科学の分野では、「ヒューマンセクソロジー」がすべての項目にわたり5段階で4以上のポイントを得ており、受講生の評価はきわめて高い。「スポーツと権利」「現代社会とスポーツ」「地域社会とスポーツ」についても、総じて3.5以上の評価を得ており、けっして低い水準ではない。上述した3つの授業において、高いポイントを得ている項目は一様ではなく、そのことは、それぞれの教師が特色ある授業を展開していることをうかがわせる。ただし、他の授業科目にも共通することではあるが、「学生の授業への出席状況」が共通して高いポイントを得ているのに対し、「学生の授業への参加意欲・積極性」はそれほど高くない。以上から、3つの授業については、学生の参加意欲・積極性はそれほど高くないが、真面目に授業に出席し、まずまずの満足を与えている、といった授業像が浮かび上がる。なお、「講義要綱の記述等の役立ち具合」については、共通して高い評価を得ていない。改良の余地がありそうである。

本年度、全学的に着手された施策の1つに成績の評価基準の変更がある。この変更がもたらした実践上のインパクトについて、包括的に検討するための資料を入手できなかった。入手しえた授業の成績評価から推論すれば、ガイドラインを意識しながら、それに沿った成績評価をしているように見受けられる。ただし、実技の授業ほどではないが、疑問や難点も出されており、経験を交流する必要がある。 (高津 勝)

<開設した授業ごとの総括>

スポーツ科学・健康科学「スポーツと権利」(内海和雄 火3・夏)

登録者：99名

本年度テーマ プロ・スポーツ論

「プロ・スポーツ論」として、プロ・スポーツの成立、プロ・スポーツの国際比較、プロ・スポーツ選手の権利、サポーターの権利など、現代の焦点であるにもかかわらず、あまり研究の対象とされてこなかった問題についてテーマ化した。途中、プロ野球選手会の顧問弁護士の講義もあり、学生には好評であった。特に、一見華やかなプロ・スポーツ界はマスコミに現れたごく表面のことであり、実質は労働条件、セカンドキャリアを含めて極めて深刻な実態にあることを知るにつけ、学生の関心の対象も少し変化したように思える。こうして、プロ・スポーツの社会科学的な視点は提起できたように思う。

現在の学生の関心事をテーマ化して講義を開講することは相当な負担となるが、できる条件にあれば、挑戦してみるのも面白い。それと同時に、現在手つかずの問題も多くあることが分

かった。また、この講義の後、2年生から後期ゼミの開講について問い合わせを受けた。

結局、この講義ノートを基盤として『プロ・スポーツ論 スポーツ社会学の視座』の出版に漕ぎ着けた。講義準備に厳しい毎週であったが、充実した日々でもあった。来年度は、できれば、プロ・スポーツ分野の多様な人々との連絡をより密にして進めたい。

スポーツ科学・健康科学「現代社会とスポーツ」(岡本純也 水・2夏)

登録者：66名(1年14名, 2年18名, 3年14名, 4年19名)

レポート提出者 63名(1年13名, 2年15名, 3年13名, 4年10名)

成績 A 9名, B 20名, C 16名, D 1名

このテーマで講義を行って5年目となる。例年通り「プレイ論」から始め、「スポーツはなぜ普及したのか」、「ドーピング-何が問題か-」、「スポーツファンを考える」、「アマチュアリズムの崩壊とスポーツの商業主義」というトピックでそれぞれ数回ずつの講義を行った。今回は、スポーツの普及について考える際に、イングランドの伝統的フットボールに関するビデオを、スポーツの商業主義について考える際に、「スポーツは誰のために」の「大学スポーツ」に関する部分を使用した。ビデオ教材を使用すると受講生の、テーマへの関心度が深まるように思うのだが、それをさらに深めて考えさせるようにするには、一定の教授技術が必要である。できるだけビデオをみる際のポイントを指示した後に鑑賞に入るのだが、その後は感想文を書かせるのみに終わってしまっている。他の教官はどのような方法で視聴覚教材を使用しているのだろうか。今度、実践交流会などで議論したいものである。

スポーツ科学・健康科学「地域社会とスポーツ」(尾崎正峰 木4・夏)

登録者：139名

授業への「出席」が全学FDでも話題となったが、そこでの議論と重なる部分が多かった。一番多いパターンは、2、3回出席して次の回は休む、というものであった。それでも、全体としてみるならば、「出席率」そのものは低くないといえる。

しかし、ここ数年の傾向として、出席率が高い学生でも「最終レポート」の「質と量」が不十分なものが目立つことである。もちろん、中身のあるレポートを提出する学生もいるが、出席とレポートの中身が結びつかないという状況は、他のエリア、学部の講義においても同様の傾向なのかについて情報交換をしたいところである。

スポーツ科学・健康科学「現代スポーツ論」(坂 なつこ 金4・冬)

登録者：437名

「スポーツ」を相対化するというテーマを持って行ったが、「スポーツ好き」はやはり多く、スポーツを社会現象、文化現象の一つとして社会科学的に捉えるということが伝わったかどうかは疑問である。また、上記テーマを行うためには歴史的、社会科学的な部分にもふれなければならず、「現代」スポーツから逸脱する部分も多かった。本年度はなるべく「スポーツ」を意識して授業を組み立てたので、昨年よりはおおむね理解があったようには思う。全体的に、ビデオ教材を多用した。資料も多く配るよう心がけた。しかし、やはり詰め込みの感も否めず、せっかくの教材を十分説明しきれなかったことが課題となった。

ワールドカップバレーや、アテネオリンピック前年ということもあり、学生のスポーツへの関心は高かったように思う。また、スポーツ方法の学生が多く履修していたのも特徴的であった。実技としてのスポーツと、社会科学としてのスポーツを結びつけて考えるよい機会なので今後もそのような学生が増えるように努力したい。

スポーツ科学・健康科学「スポーツと映像文化」(鬼丸正明 木3・冬)

登録者：824名

本年度は、「物語論(ジェンダー論)」の講義を減らし、全部で11回講義を行った。メディア・スポーツ論における映像論の意義をオリエンテーションだけでなく、毎回の授業で強調したので「なぜ、スポーツの授業で映画ばかり見るんですか」という質問は殆どなくなった。それから、映像論の現状、及びそれと本講義の関係についても折に触れ説明していったので、「先生の理論的立場は何ですか?」というような類の質問も殆どなくなった。映像史のなかにおけるスポーツ映像の位置について例年より理解が深まったのではないかと思う。

ここ数年の懸案であった「ゲーム論」「アニメ論」は今年も果たせず、来年度以降の課題としたいと思う。

(4) 教養ゼミ

教養ゼミ 坂 なつこ(金4・夏)

テーマ：「豊かさを考える」

受講者：15名

「豊かさ」というのは興味を引くテーマだったようで(また、時間割の都合で)多くの学生がガイダンスにきた。前半は、エンゲルス『イギリス労働者階級の状態』を輪読し、後半はテーマごとにグループをつくり自由発表をしてもらった。最後は自由発表をレポートにまとめ、レポート集を作成した。形式や取り組みの質は様々になってしまったが、学生にはおおむね好評のようだった。

抽選で15名を選んだが、やはりゼミナール形式という点では多すぎた。議論が散漫になる場面が多く、ともに不満が残った。また、グループワークを意図していたが、結果的には個々人の発表となり、テーマや素材が重複するなどここでも散漫な印象が残った。

学生の意欲は高く、特に古典を読むという点に関しては興味を持っているようであった。また、上記テキストを読んだことで、ある学生はパン工場のアルバイトを経験しに行くなど、歴史や理論と実践を結びつけようとする姿も見られた。

教養ゼミ 早川武彦(火2・冬)

テーマ：スポーツネットワークをひも解く

受講者：15名 (授業回数：13回)

15名と昨年同様多人数過ぎると思ったが、受講意欲が感じられたことからそのままスタートした。構成は1年生：5名、2年生：10名。ほぼ全員が毎回出席し集中したゼミ活動になった。テーマの「スポーツネットワークをひも解く」は、スポーツが多様な側面から成り立っており、

それらが一定の関連をもっていることを理解することにあつた。そこで オリンピックと経済効果、 クラブ経営と地域、 漫画とスポーツという3側面からそれぞれの問題を掘り下げ全体として今日のスポーツ問題を浮き彫りにし、そこに内在する関係性を見ていくことにした。

前半は、各自が自分の関心事をテーマに、毎回2人、話題を提供し、論議した。報告テーマ・内容・方法がしっかりしておりその後の議論が活発で昨年までにはなかった積極的な活動を展開した。グループテーマのまとめ・報告も内容的に充実したものになりそれぞれ満足したゼミとなった。

各自の報告テーマは以下の通りである。「スポーツとマスメディアの関係についての推論」「人間が採点する競技である限り」「ダイエー小久保・巨人への無償トレードからプロ野球を考える」「サッカーを語る」「マスコミのスポーツ報道」「武道とスポーツ」「東チモールのスポーツ活動とNGO支援」「女子スポーツ選手とメディア」「Jリーグ昇格を目指すザスパ草津」「Leipzig～2012年夏季五輪開催に向けて」「昨今の企業スポーツについて」「少年スポーツと総合型地域スポーツクラブ」「Jクラブの目指すべき姿を欧州サッカークラブから考える」「スポーツと政治」

毎回の報告および最終グループ報告は「早川教養ゼミ」HPに掲載され、自分たち自身の活動意欲を一層刺激することとなった。

身近なスポーツから世界のスポーツへ、メジャーなスポーツからマイナーなスポーツへ、プロ・スポーツからスポーツ支援活動まで一人では決して視野に入らない視点や活動をキャッチできたことは当初の目的である、スポーツのネットワーク状況をひも解くテーマに十分迫り得たといえよう。

教養ゼミ 上野卓郎（火3・冬）

テーマ：マルクスの初期著作と「資本論」の方法論理の擁護

受講者：3名（1年商1、2年経1、社1）。

「経済学・哲学草稿」、「ドイツイデオロギー」、「資本論」第1分冊をそれぞれ分担レジュメ、討論。マルクス主義について先入観なしに資本主義の根本問題と変革の社会構想について議論し合った。1月末の総括ゼミで異口同音に「労働」の問題（本質と現状と変化）への関心が示され、それまでのゼミで強く現れていた「人間性」への関心と結びついて、彼らなりの社会科学の核が彩成されたと思われる。方法論理については前年までのゼミほど私の説明は必要なかったが、これは上記の彼らの関心からすれば中心的なものでなかったからであろう。テキスト3冊の指定は適切だったと彼らは評価した。ゼミ総括論文を課した（2月17日締め切り、5000字）が、これは次の担当のさいに重要な参考資料になるだろう（ただし次年度は担当しない）。体調の関係でゼミコンパを1回も行わなかったのが心残りではある。

教養ゼミ 岡本純也（水2・冬）

テーマ：観光産業の隆盛と伝統文化の活性化

受講者：11名 合格者11名

「観光」をテーマにしたせいであろうか、例年になく20名を超える希望者が第1回目に集まった。2回目にも20名を超えていたら抽選を行おうと思っていたが、11名まで人数が絞れ

たので、この人数でゼミを開くことにした。これまで教養ゼミで「抽選」の必要性を考えたことはなかったが、来年度からは、1回目から2回目までの間に抽選ができるように準備をして臨まなければならないと実感した。

教養ゼミでは、研究を進めていくための基礎技術の習得がひとつの目的となる。例年、ゼミ生が少なかったこともあり、個別にゼミでの作法を教えていたが、今年度から2回目のゼミで、報告の仕方、レジュメの作成方法、資料の検索方法などについてレクチャーすることにした。また、図書館で行っている資料検索ガイダンスをゼミ単位で受講させた。その結果、レジュメの体裁や資料の提示方法など、例年と比べ、格段によくなったと思われる。

3回目以降は、山下晋司編『観光人類学』を1章ずつ輪読していった。週に1章は、ややゆっくりとしたペースであったが、その分、やる気のあるゼミ生はテキスト以外の資料なども用意して問題提起などを行った。しかしながら、全体的になかなかディスカッションが盛り上がりやすく困ることが多く、来年度以降は、議論を盛んにするための何らかの方策を考えねばならないと思った。こちらから質問をすれば感想や意見などを答えるのだが、積極的に自らすすんで自己の考えを述べる者が少ない。対策としては、たとえば、毎回、感想・コメントを事前に提出させて、それをもとにディスカッションを行うようにしたり、対立する論点ごとにグループを作り、その説や論を補強するような資料を調べさせてそれをもとに議論させるなど、討論の方法を工夫したらいいのではないか。

ゼミの最終段階では、各自が自分の研究テーマでレポートを作成することとした。中間報告の段階のテーマは以下とおり。

- 「ディズニーランドの巡礼観光～日本人版～」
- 「四国巡礼の旅」
- 「国際観光地としての日本の現状とこれから」
- 「日本の温泉はどこに行くのか」
- 「町並み保存のための地元住民の取り組みについて」
- 「何を撮り、何を撮らなかったのか ある旅行と写真の関係」
- 「メディアと観光地のイメージの関係」
- 「メディア時代の観光旅行」
- 「旅の歴史とその本質について」
- 「食と観光」
- 「発展途上国を救う観光旅行」

最後に、これらのレポートを合冊し、レポート集として製本した。

教養ゼミ 高津 勝（木3・冬）

テーマ：「スポーツはどこから来て、どこへ行くのか」

受講者：3名（内訳は、社1＝1名。社2年＝1名。経2年＝1名。）

テキストは、中村敏雄『[増補]オフサイドはなぜ反則か』(平凡社ライブラリー415)2001年。各章ごとにレポーターを決めて発表、討論を繰り返した。受講生が予想より少なく、盛り上がり欠けた感があるが、講義要綱に示した内容に従い、無事終了。受講生にとって、スポーツに関する歴史的・社会的な認識を深めるいい機会になったと思う。

(5) 学部講義・ゼミ

商学部講義・スポーツ産業論 早川武彦(金3・冬)

受講者 77 名、単位取得者 64 名

授業は、スポーツ産業論の概論としてスポーツ・マネジメント、スポーツ・マーケティングおよびメディア・スポーツについての講義、具体的な現場からの外部講師 3 名によるレクチャー、グループによるワークショップ報告とレポートで構成された。13 回と少ない授業だけに少し盛沢山になりすぎた感は否めない。

本授業のねらいは、スポーツと産業・ビジネスとのよりよい関係を構築するための考え方を理論と実際両面から考えていくことにある。理論面では既存のマネジメント論やマーケティング論の知識を組み入れ、スポーツ論をベースにその関係性を問題としたが、時間的な制約もあり十分な内容には至らなかった。実際面では、その分野・業界で活躍している方々に最先端の情報を提供していただいた。既成の書物・雑誌や新聞等で知り得ない内容だけに大きな関心が寄せられ成果は大きかった。そしてグループによるワークショップは、16 のテーマに取り組んだ。問題関心は、「クラブ経営」「エージェント」「プロ・サッカー」「格闘技」などプロ・スポーツに関わる内容が大半。

外部講師には、スポーツビジネスを立ち上げ、中国スポーツ界でスポーツビジネスを手がけ始めた案野裕之氏、プロ野球選手、特に最近では高津投手の代理人を務めているスポーツ代理人の水戸重之氏、そして予定外だったがドライバーかつマネージャーというマルチな顔を持つインディードライバーの服部茂彰氏らにお願いした。それぞれトップクラスの方々だけにどの講師の話も新鮮で、内容が濃く、滅多に知り得ない内情など非上に有益な情報が提供された。感想文などから受講者の高い満足度を知ることができる。

ワークショップは、中間と最終報告を経て最終レポートの提出とした。レポートの作成上、課題意識、論証、まとめなどにおいて荒さが目立つ。特に、資料の活用で引用にもかかわらず、自分たちの意見としている者が多く見受けられ、先行研究への尊敬や位置づけが希薄になっている。

最終レポートは可能な限り HP で公開しようと思っている。

社会学部講義・スポーツの歴史社会学 高津 勝(火3・夏)

受講者：69 名。

スポーツと社会の関係を示す歴史的なトピックをとりあげ、スポーツに関する主体的な認識の形成をめざした。内容は『講義要綱』を参照されたい。

講義とテーマ別のグループワークを並行させ、最後に期末発表をやって授業を終える、という流れであった。ただし、講義のときの出席が悪く、講義の内容がグループ活動に反映したとはいえなかった。両者の関係を再考する必要がある。グループのテーマは、アップ・ツー・デイトなものが多く、体系的な知識に接し、それとのかかわりで自分なりに社会認識を深める、といった展開にはならなかった。が、学生の主体的な参加や問題意識を重視する授業展開をめざすかぎり、そうしたズレはつきものなのだろう。とはいえ、何が基礎・基本か、といったことを抑えることも必要であり、その点では、講義を基礎にした

期末試験の導入という手法も、加味すべきなのかもしれない。

ちなみに、編成したグループは以下のとおり。「スポーツとは何か - 「競技化」を問う - 」「スポーツとナショナリズム」「アマチュアスポーツの現状と未来」「スポーツ - イベント化・ビジネス化の功罪 - 」「海外ビッククラブ - 光と陰 - 」「スポーツとマスメディア」「テレビソフトとしてのスポーツ」「スポーツ観戦行動の諸相」「スポーツブランドの光と陰」。

また、プロ野球選手会の顧問弁護士の講演（内海氏の授業の一貫として行われたもの）に乗っかる形でその企画に合流させて貰った。生きた法律学とでもいうべき内容とリアルな情報に、受講生は感慨深げであった。なお、私の授業に関する全体的な感想を学期末に聞いたところ、「もっと専門的なことも期待していた」という指摘が2件あった。この件については、何を意味するのか、ということの解明も含めて、引き続き検討していきたいと思う。

社会学部講義・スポーツ問題の社会学 尾崎正峰（木2・冬）

受講者：73名

全体として大きく2期に分け、前期を講義（テーマ：「スポーツとグローバリゼーション」「地域『開発』とスポーツ」「スポーツとナショナリズム」「スポーツとメディア」）、後期をグループ討論に基づく個別発表の形式で進めた。

講義については、その後の個人のテーマやグループのテーマにつながることもあり、できるだけ具体的な事例を挙げることにした。

グループ討論は、テーマ別の11のグループに分かれて行った。最初のうちはグループ討論のやり方などで戸惑っていた面もあったが、その時々のおねらいや課題について教師の側から提示することで議論を進めていった。何回か討論を経験すると、自分たちで議論を進めるようになった。

発表については、中間発表、最終発表と段階を踏んだ。また、各人の中間発表・中間レポートについて教師のコメントを付して返却し、最終発表・最終レポートへの参考とするようにした。発表、そしてレポートは、それぞれの学生のテーマに即して、さまざまな事例が取り上げられた。ただ、人数が60名弱であったので、若干、時間的・日程的に厳しい感じを持った（一人5分の発表時間を3コマずつ）。

社会学部講義・スポーツと社会過程 坂 なつこ（金2・夏）

受講者：

歴史的、理論的な内容に学生がよく反応していた。ここでも毎回コメントをとったことが、学生の理解を把握する上で有効だった。もうすこし人数が少ないとグループワークなどで、より参加型の授業ができると思う。しかし、理論的な講義への要望も多く、学部の授業としてはより社会的な内容でも可能であると感じた。

社会学部講義 上野卓郎

学部講義—大学院講義の項で(共修のため)

社会学部講義・身体と教育 鬼丸正明（月1・夏）

受講者：363名

「衛生と身体」「戦争と身体」「ジェンダーと身体」「群衆と身体」「パノラマと身体」「メディア・映像と身体」「故郷」という空間」「幽霊と身体」「離人症と身体」「心」と身体」「都市・形成・サブカルチャー」というテーマで授業を行った。

今年は「故郷」「離人症」「心」というテーマを新たに講じた。「故郷」というメディア空間がいかに都市に形成され、それがナショナリズムと接合していったのか、今日のポストコロニアリズムとも関連させながら論じた。「離人症」「心」という講義では精神分裂病境界例 離人症という精神系の系譜を追いながら、「ひきこもり」「リストカット」「援助交際」という「心」の現状をどう理解するか、そして国家による「心」の支配をどう理解するか論じようとしてみた。まだまだ不勉強のため言葉足らずな授業になったが、ようやくメディア論と教育論が交錯する理論的地平が見えてきたように思われる。今年度までは「都市・メディア・身体」を中心に論じてきたが、来年度は今日の教育の課題と意識的に絡ませながら議論していきたいと思う。

< 学部ゼミ >

商学部ゼミ 早川武彦（木4・5）

3ゼミ：「メディアとしてのスポーツを考える」 人数：7名

今年の3ゼミはこれまでにない特徴が3点上げられる。第1点は、ゼミ生に東工大生が参加したこと。そして第2点は、3ゼミを中心に J-Sport Broadcasting 会社との共同プロジェクトを進めたこと、そして第3点はテレビ業界でのインターンシップを試みたことである。

4 大学連合による制度でゼミ生が参加したのは初めてであり、積極的な参加がゼミ活動を活発にさせた。論理的思考や情報ソースにおいて本学では得難いものがあり、本学ゼミ生は大いに啓発させられた感がある。

J-Sport との共同プロジェクトは、岡本助教授や大学院生にも参加してもらい、2度の学内アンケート調査を経て、現在そのまとめを急いでいる。このプロジェクトは日経新聞（2003.12.29）や日経産業新聞(2004.2.3)などに取り上げられたこともあり、朝日新聞や読売新聞などから調査結果の問い合わせが寄せられた。産学連携の動きがあるだけにそうした観点からの関心の現れかもしれない。このプロジェクトの目的は、「大学生のスポーツ視聴動向と有料放送の関心およびその可能性」分析にある。結果は後日の報告書を参照されたい。

インターンシップは、TBS、東京テレビ、MX テレビ、J Sport の4社で、夏休み中に行った。他大学特に私学では数年前から取り組んでおり、本学に置いても積極的に取り入れる必要があるだろう。将来、この分野で仕事に就くかどうかは別にして2週間くらいの期間だが仕事内容を知る上で大きな経験を得られたようだ。

以上のようなことが上手くかみ合い、3ゼミ生の活動は冬学期以降具体的なプロジェクトにむかって動き出した。学内のスポーツ活動を活性化させるために“元気がでるスポーツ”放送（20分間番組）を毎週、木曜の昼休みに立ち上げた。学生からの反応が徐々に得られ、早くも来年度の番組への申し出がでてきている。だが本来的な活動は、早川ゼミが学内スポーツの

情報メディア(交流)となることで、学生の学内交流を活性化することにある。そのためには、スポーツ団体、体育会、自治会など様々な団体、組織、機関とのネットワーク的な関係を造出する必要があり、さらなる創造的な活動が求められよう。

4ゼミ テーマ:「スポーツが豊かになるための関係を探る」 人数:8名

昨年、全体プロジェクトに取り組みその成果をもとに今年は各自の卒論作成を手がけた。昨年度の情報収集活動、内容構成、公開発表などの経験が生かされそれぞれの論文がしっかりした者になった。公開の卒論発表会でのフロアーからの評価も高く、ここだけで終わらせるのはもったいないので、他で是非発表してはどうかとの発言も頂いた。因みに今年の外部参加者は40数名だった。卒論のテーマは以下の通り。

「携帯でスポーツチームとファンはより幸せな関係を築く」、「大学スポーツと企業のパートナーシップの可能性」、「地域に根ざす野球チーム作り」、「スポーツの公共性とは～巨大スタジアム問題に関する公共性の考察～」、「スポーツ施設マネジメント-スポーツ振興と地域開発」、「“観る”スポーツ振興の一案として～大学生に大学スポーツ観戦を～」、「Sport as an Entertainment」,[サッカーの試合を観てもらうには]、「プロ・スポーツ経営と株式上場(院)」、「J-Sport との共同研究中間報告～大学生のスポーツ視聴動向」、「学内スポーツ活性化に向けたプロジェクト～元気の出るスポーツ放送～」

商学部ゼミ 岡本純也(金4・5)

人数;3名(3年;2、4年;1)

夏学期には、井上俊・亀山佳明編『スポーツ文化を学ぶ人のために』(世界思想社1999年)を、冬学期には、原田宗彦編著『スポーツ産業論入門 第3版』(杏林書院2003年)を輪読した。また、冬学期には、英語の文献を読みたいというゼミ生の希望により、Mark Rosentraub, *Major League Loser(Revised Edition)*, Basic Books, 1999 と Andrew Zimbalist, *Unpaid Professionals*, Princeton University Press, 2001 を交互に、日本語文献の輪読の前に読むこととした。冬学期の最後には、3年生2人の卒論のテーマを検討し、4月までにそのテーマについてのレポートを提出することとした。

今年度は日程の調整がうまくいかず、ゼミ合宿を行えなかったが、来年度はしっかりと長時間にわたって議論ができる時間をとれるようにしたいと思う。

社会学部ゼミ 藤田和也(月4・5)

テーマ:子どもの発達と社会

人数:3名(4年;1、3年;2)

3年生はゼミの前半では、第二次大戦後の日本社会の少子化の進行とその要因についていくつかの文献をもとに報告討論し、後半は、各自の関心事に引き寄せて研究テーマに熟させていくための作業をそれぞれに進め、報告討論した。

4年生は、中田ゼミからの移籍であったため、卒論テーマを追究する作業に集中させ、進行状況に応じてゼミでの報告と討論をした。

社会学部ゼミ 高津 勝(木4・5)

講義テーマ：「人はなぜスポーツに感動するのか～スポーツ文化の歴史・社会的究明～」

3年ゼミ 人数：4名

スポーツ社会学に関連する内外の基本文献・論文を読み、議論した。

夏休みに韓国旅行(ゼミ合宿)を行い、ソウルのオリンピック記念博物館の見学とプロ野球観戦を実施した。サッカー観戦は、ゲームが中止になったため実現しなかったが、開催チームのオーナーおよび広報担当者から短時間ではあったが、韓国のサッカー事情を聴くことができた。

4年ゼミ 人数：2名

卒論指導を中心に行った。

テーマは、「パ・リーグ改革」と「日本フットボールの未来」。

社会学部ゼミ 内海和雄(月4・5)

テーマ：スポーツ社会学の検討 人数：3名

4限は英語文献の講読。5限は日本語文献の講読。5限の冬学期は卒論指導の場となった。2名が執筆したが、題名は『「するスポーツ」と「見るスポーツ」との関係』『高齢社会におけるスポーツの意義と実態』である。最終的には良くまとめきったと思う。

社会学部ゼミ 上野卓郎(木4)

人数：2名(4年；2〔主1、副1〕)

3年からの持ち上がりで、5月末までの在外研究後、6月第1週から開始。この時、3年ゼミ終了時に提起していた卒論テーマ第一次案の報告、研究計画を討論。2人とも院進学希望だったので、それも考慮して指導した。主の方はスポーツ社会学(身体社会史)、副の方は哲学(空間概念)と、異なるテーマで、よく発言する副の方のテーマでの討論が多くなりがちだった。夏学期は3年ゼミから引き続く「資本論」を共通テキストに第3,4分冊に進み、資本成立の歴史と論理を研究することにした。冬学期は卒論テーマ第二次案とそれに基づく研究報告、論文構想発表と練り直し、12月に個別に論文執筆指導、1月中旬に論文執筆状況発表、1月末提出後、2月初旬に提出卒論概要報告、ゼミまとめというプロセスですすめた。2人とも9月のM入試に合格。ゼミコンパは夏・冬各2回。合宿は行わず。

主の学生の卒論題目「日本における身体近代化政策一兵式体操からラジオ体操へ」。副の方は正確でないが「戸坂潤の空間概念論 .カント、カッシーラとともに」といったテーマだった。

3年ゼミは開講しなかった(5月末までの在外研究のため)。

社会学部ゼミ 坂 なつこ(木5)

テーマ：『カルチュラルスタディーズ入門』(G.グレアム)を読む 人数：4名

上記文献をはじめ、カルチュラルスタディーズのテキストを中心に「文化」について考えた。「社会学」を勉強したいという要望がよかった。冬学期には2泊3日で清里でゼミが宿を行い『フーコーの全体的なもの個的なもの』を中心に議論した。様々な立場や興味の方向があ

り、時には議論がかみ合わない面もあったが、時間を気にせずリラックスして議論できることもあり、ゼミ合宿は好評のようであった。

来年度、教員が海外研修とうことで今年度のみ開講になるが、そのため（就職活動が早期になっていることも併せて）卒業論文のテーマについて早めではあるが考えるように促す機会をおおくもった。

（６）大学院講義・ゼミ

大学院講義 早川武彦（木２・冬）

テーマ：メディア・スポーツ論 人数：４名（DC；１、MC；３）

受講者が論文からアップ・デートな問題を報告し、それを基にメディア・スポーツの現状と問題を論議した。取り上げた論文は、Falcous, M., (1998), "TV Made it All a New Game; Not Again!-Rugby League and the Case of the SuperLeague", 「欧州サッカー経済白書～テレビが引き金を引いた、バブルの緩慢な崩壊～」『スポルティーバ』2003.8」「これからの時代のBBCのスポーツ放送の役割～2001年3月にCMSの委員会に提出された資料をもとに～」『イギリス；スポーツ放送と公共サービス放送（中村美子著）～有料放送の進出とユニバーサル・アクセス～』『スポーツとメディア』など。

議論において、かつて広告代理店に勤務していたという受講者の参加があり、イベントやCM制作に関する詳細な情報を提示したもともあって、この分野の現状と問題をかなり理解することができた。

大学院講義 岡本純也（木２・夏）

講義テーマ：スポーツ・イベント論 人数：３名（DC；１，MC；２）

今年度はテーマを「スポーツ・ツーリズム」に設定し、これに関連するジャーナルを中心に、それぞれの参加者が論文を紹介し合うという方式をとった。

大学院講義 藤田和也（火・３夏）

講義テーマ：教育保健論（第二次大戦後の子どもの発達問題と日本社会） 人数：３名

前半は、第二次大戦後の日本の子どもの健康・発達問題の変遷について講義し、後半は受講者のそれぞれの研究分野から子どもの健康・発達とその保障の問題にアプローチするレポートを課してディスカッションを進め、最終的に、それぞれのアプローチを小論文にまとめた。

大学院講義 上野卓郎（火２・冬）

学部との共修講義：身体社会史。 人数：９名（３年；３、４年；２、M1；３（内、言語社研１、D3；１））。

受講生のテーマによる報告と討論を１人ずつ９週、残り３週で２-３人ずつの２回目の報告と討論（２人が２回目行わず）、オリテを含めて１３週行った。

最終提出論文の締め切り（２月１７日）前のまとめなので、２回目の報告テーマ（２人は１回

目の)を紹介する。

A「小説"American Psycho"にみる身体」(3年)、B「健康ブームと現代日本の身体観」(3年)、C「戦時期日本の厚生政策」(3年)、D「現代社会における身体」(4年)、E「市川浩『精神としての身体』考」(4年)、F「現実認識における神話的構造」(M1年)、G「文学作品における『病身』」(M1年)、H「現在の身体への向き合い方」(言語社研 M1年)、I「過去の身体』を読み解く:電話交換手を事例とする『身体社会史』の試み」(D3年)。

最終提出論文は『身体社会史小論文集』として冊子にする予定。

昨年度結局1人(3年主ゼミテン)の授業だったのと比べると、今回の授業は学部・大学院共修科目にふさわしい受講生構成と内容で、非常に面白かった。オリテ後入院の実質第1週の司会をD3年(副ゼミテン)が担当、その後もこの授業のティーチングアシスタント(申請間に合わず)的役割を果たしてくれた。4年副ゼミテンが受講したが、自分の哲学的テーマと身体の問題が結びつかず、上記Eの報告にとどまったのは残念。

M1年は3人とも他大学出身、内1人は1回目の報告(F)への3,4年生からの鋭い批判の後2回目報告せず、出席も途絶えた。あとの2人は完全出席、報告も発展し、内1人(言語社研)は最終回に来年度副ゼミを希望したほど(他のゼミを紹介し断ったが)。M指導は研究科全体の課題だが、個別具体的にこれにどう取り組むか、以前の単発一的な副ゼミとしての指導でなく、初めての今回の授業の経験をもとに、スポーツ社会学講座での議論をすすめていきたい。

大学院講義 尾崎正峰(月3・夏)

講義テーマ:スポーツ政策の国際比較 人数:1名

「地域スポーツ論」

日本を中心とするスポーツ政策の交際比較がテーマであった。

受講生が一人だったので、その院生のテーマ(障害者スポーツ、子どものスポーツ)に関する政策動向についての検証と院生の個別発表が具体的な内容であった。

大学院講義 坂 なつこ(金2・冬)

講義テーマ:国際スポーツ論 人数:4名

エリアス『スポーツと文明化』を呼んだ。スポーツ社会学以外からの院生が2名おり、専門的な議論というよりは基本的なスポーツ史をサーベイした。院のゼミには珍しくビデオ教材を使うなどしたが、自由な雰囲気でも議論できたことはよかった。

しかし、大学院ということもあり、専門性を追求する必要性も感じられる。院生も多様化しており、今後の課題かもしれない。

大学院ゼミ 早川武彦(木・3)

テーマ:スポーツ経営とスポーツ消費過程 人数:4名(DC;2、MC;2)

本ゼミ所属院生以外にアメリカ文学史専攻、経営修士課程コース所属者らと研究領域のことなる参加によって広がりのある内容を論議しえた。中心は修論とプロポーザルそれぞれの検討にあった。例年のことだが、岡本氏にも指導をお願いしそれぞれ論文作成で貴重なアドバイス

を得た。

大学院ゼミ 藤田和也(火・2)

テーマ：臨床教育学と教育実践研究の課題と方法 人数：4名

前半は、『臨床教育学序説』をテキストにして受講者が掲載論文の中から自分の研究関心に近い論文を選んで検討するゼミを進め、後半は、それぞれ(受講者はすべて博士後期課程)のD論計画に基づいて報告と討論を進めた。

大学院ゼミ 高津勝(木2)

テーマ：スポーツ社会学 人数：1名

ゼミ生の問題関心にしたがって報告・議論した。

大学院ゼミ 内海和雄(火2)

テーマ：スポーツ社会学演習とイギリス研究の準備 人数：2

夏学期は「プロ・スポーツ論」の講義と議論を行い、冬学期は、年度末に予定しているイギリス研究のために、前半は『イギリスのスポーツ・フォー・オール』(内海著)を講読して学び、後半は院生のイギリスでの研究計画を検討した。院生は修士論文と博士論文の一環として、イギリスを位置付けている。

大学院ゼミ 上野卓郎(木5)

副ゼミテン2人(D4,D3)。共にD論指導委員として指導。

D4は昨年度1年間奨学金でドイツ留学、本年度復学。論文計画書事前指導、04年1月研究科委員会で提出確認。04年論文提出予定。論文題目「技術、社会的結合、身体 近代ドイツ・日本における<電話交換手/電信技手>のジェンダー・ポリティクス」。主ゼミは木本ゼミ。D3は03年2/3月1か月モスクワ資料収集同行。滞在中モスクワ・ゼミ。3月ベルリン・ライプチヒ・ゼミ(3日間)。6月から研究報告、ドイツ語論文翻訳、論文計画書事前指導、全面書き直し、提出延期。論文題目予定「ソ連・コミンテルンとスペイン内戦 ソ連とコミンテルンのスペイン内戦政策の全体像にせまる」。主ゼミは加藤ゼミ

研究科の制度での初めての論文指導委員として本年度から来年度は責任が重い。本年度は在外研究で6月からの開始、さらに9/10月の入院で約1か月休講という不正常なゼミではあったが、それぞれ個別指導をすることができた。D4は身体社会史の受講で研究指導の経験をし、この4月から課程修了して学術振興会特別研究員(ポスドク)採用が決まった(志願書・面接事前指導を行った)。D3が提出延期した論文計画書の来年度早々の提出に向けた指導が残っている。来年度は4年ゼミから進学する初めてのMの主ゼミテンの指導にあたることになる。

3 . 教育条件の整備・拡充

(1) 施設・設備：今年度改善された施設・設備は以下の通りである。

特に教務課学生課の協力には感謝したい。

体育館

- ・ 壁面鏡延長設置
- ・ バスケットボード設置
- ・ ホワイトボード設置
- ・ 玄関自動点滅器（外灯）
- ・ 玄関マット

テニス・バレーコート

- ・ 日除け（ 3 カ所）
- ・ ベンチ

陸上競技場・野球場

- ・ 屋外時計（ 2 カ所）

西更衣室

- ・ 泥よけすのこ

この他、テレビ写りが悪く、アンテナの位置を変えても限界であったが、国際研究館から地下ケーブルでアンテナを引いてくれて全チャンネルの写りが改善された。

また、実現はしていないが、雨天時の教室、そしてそこでの視聴覚施設の完備をもう少し充実して欲しいとの要望が強い。

バレーボール、テニスコート等の管理は十分に行き届いていた。

(2) 体育館建設問題

体育館建設について、2003年7月1日に、「授業に関わる施設整備について(要望)」を杉山副学長へ提出した。これは「副学長が学長と話し合う上での資料」としての性格であるが、現実の授業への支障を示し、以下の内容を要求した。

- 1 . 新体育館・プールを建設すること。
- 2 . 上記 1 の実現が非常に困難な現状に鑑み、以下の施設を早急に整備すること。

(1) 現体育館の増改築

(2) 新体育館・プール予定地の用途変更にかかる「体育施設等」の整備

である。

これに補足文書を添付し、「授業を進めていく上でこんな問題が起こっている」「学生にこうした不利益がある」等、授業の実態に即した説明を加えた。

以上の件について 10 月 28 日に石学長と懇談を持った。学長は、状況の厳しさを話したが、我々もせめて現体育館の増改築の実現を要求した。

その後、2004年3月24日、体育館問題について杉山副学長との懇談の機会をもった（杉山副学長、藤田大教センター長、尾崎室長、岡本教育部長が出席）。副学長からは、学長が施設課に（国立）体育館増築案を打診し、2案が返答されたことの説明があった。

第 1 案は上部増築案であり、第 2 案は横増築案であった。施設課から提出された、施行手順

と問題点は以下の通りである。

(1)「上部増築案」

施行手順

- ア．既存の屋根及び上部鉄骨部を撤去し、下部構造の基礎、柱、壁の補強及び増設する。
- イ．2階部分の床、柱、壁及び屋根を施行する。

問題点

- ア．新築並の経費を要する。
- イ．1階部分は2階を支えるための耐力壁を設置するため小割の空間となり球技には対応できない。
- ウ．建物高さが増すため影が民地にかかるので近隣問題が起こる可能性あり。

(2)「横増築案」

増築範囲は隣地境界の関係から武道場ラインまでと考える。

施行手順

- ア．既存器具庫の撤去
- イ．既存建物の増築側壁及び屋根の一部撤去
- ウ．増築部分を施行する。

問題点

- ア．増築によりバレーボール1面は確保可能であるが、バスケットボールが確保できないため増築のメリットが極めて少ない。
- イ．既存体育館が昭和54年建設で経年24年経っており、仮に改築計画が浮上した場合増築部分を残すことになると非効率的な平面計画になるおそれがある。
- ウ．建物が民地に接近するため影が民地にかかるので近隣問題が起こる可能性あり。

この2案の検討の結果、学長の見解は、増築は無理とのことである。

しかしこの結論は一方的なものであり、その文面からも今後の検討の余地は残されている。今後副学長を通して学長との会合を求め、以下の点などの検討を要求したい。

増設場所の問題は検討の余地がある。

「経年24年ゆえの改築計画」とはいかなるものであるか。

(3)作業員問題

前任の竹内氏の任期は2003年3月末日であったが、体育施設作業員の方針が決まらず、4～6月を継続していただいた。最終的に2003年7月1日より、「一橋大学体育施設管理業務一式」が外部委託された。履行範囲は体育館、テニスコート、バレーボールコート、陸上グラウンド、野球場であり、履行期間は単年度である。各業務の詳細は「一橋大学体育施設管理業務詳細」により、施設管理関係業務、運営関係業務、清掃関係業務、整備関係業務、その他の業務である。

(4)用具・教材

種目によっては、学生にゼッケンを預けたが、返却しなかった学生が何人かいた。中には、

スポーツ方法 の受講生で何名かが途中で参加しなくなり、そのために未返却となった。今後、返却方法に工夫が必要である。

その他の用具・教材の補給は順調に行われた。 (内海和雄)

・ 教育部活動

1 . 実践交流会

(1) 新成績評価方法の検討 (2002年5月30日教育部提案)

先ず、以下の内容が教育部からレポートされ、討論した。内容が良く整理されているので、まず第1部としてレポートを示し、後半の第2部に討論内容を示す。

第1部 レポート

- 検討課題 1 : 新しい成績評価方法基準の問題点
従来点数制の枠が取り払われたことにより、基準がより曖昧になった
のではないか
Aを3分の1以下にするというガイドライン
新たに設けられた「D」とは何なのか 等
- 検討課題 2 : 現在のわれわれの成績評価方法
具体的な評価方法、評価内容はどうしているのか
・ グループノートの評価方法
・ 「認識」の評価方法
・ A, B, C, Dの基準
種目によって評価内容は異なっているのか
現在のA, B, C, Dの比率
- 検討課題 3 : 新成績評価方法基準の下でわれわれの成績評価(方法・内容)はどのよう
に変わるか
従来A, B, C, Dを新A, B, C, D, Fにどのように配分するの
か
出席率7割の扱い方
新A, B, C, D, Fの基準
種目によって評価基準・評価内容は異なってよいのか
種目間で共通する評価内容・評価方法はあるのか
Aを3分の1に出来るのか 等

資料(事前のアンケートから:個人名は排除した。)

【アンケート結果】

- ・ 「スポーツ方法」について、今まで、どのような方法で成績評価をしてきましたか。
- 出席回数をベースに、授業当初提示しておいた各評価項目をもとに行ってきた。
 - 出席+遅刻で、A~C段階を暫定的に付けて、グループノート、レポートを加味して決定。
 - 出席点(これが一番重要)、グループノートへの記帳(グループ・ミーティングの内容)

とそれをふまえた練習計画の作成)、 期末レポート(自己及びグループの技術・戦術分析とグループ活動の分析。殆どの人が、教室での最終授業のときに記入。)の3点をふまえて評価。

- スポーツフィットネス:出席を6割の比重とし、夏・冬学期末に提出する「自己の身体の変化とトレーニング方針」というレポートおよび、冬学期に実施するグループワークで作成されたレポートの評価を合わせて採点した。 フライングディスク:出席回数と遅刻回数による評価をベースとし、5月(開始当初)と1月(終了間際)に行ったディスクの飛距離測定の伸び率などを加味して評価。
- 軟式野球・ソフトボールであり、独自の教材解釈により授業を展開している。出席日数が基本。班長の場合、打撃記録の記入、ノート維持のために、若干の考慮をする。教場の制約、教材解釈の制約のために、一斉指導方法を採用している。

・今年度の成績評価はどのようにする予定ですか。

- 昨年度と同様に行う予定であるが、少し各評価項目の内容を細かくする予定である。
- 基本的には従来通りを目安として、従来A評価の中から新Aを分けようかと思っています。しかし、絶対評価の観点からすると序列をつけるのは難しく、検討中です。
- 従来のを踏襲。ただし、従来Aを新Aと新Bに分ける。従来Bを新B、従来Cを新D、従来Dを新Fにする。
- 従来の方法を基本とし、フライングディスクでは、グループノートへの貢献度も、より重視したい。(岡本)
- 従前の「A」を「A」「B」に分ける事になると思う。

・ガイダンスにおいて、学生にはどのように説明されましたか。

- 講義要項に示した評価内容で行うとした。ただし大学全体のガイドラインができつつあるのでそれをも勘案しつつ、基本は絶対評価としたい。
- 従来通り出席+ノート重視という説明で、特に新評価についてのコメントはしませんでした。学生からも質問はなかったです。
- とくに工夫はしなかった。
- 出席率7割を基準ライン(=C:60点)とし、その他の要素(出席率も含む)で残りの40点を付けると説明した。
- 成績については特別な説明はしなかった。質問もでなかった。

【テニスでの評価】

・「スポーツ方法」について、今まで、どのような方法で成績評価をしてきましたか。評価は、以下の指標の総合。

- 1.出席
- 2.グループノートの作成と練習の実施・総括
- 3.小レポート
- 4.最終レポート

従来までは、A~Cの3段階なので、それぞれの評価は、おおむね次の通り。

- 1.出席の評価は、裏を採って、欠席の回数でランク付け
A:0~2回

B : 3 ~ 5 回

C : 6 ~ 7 回

2 . グループノートは、各人年間 2 ~ 3 回を担当

A : グループの現状をふまえた上で、計画内容がきちんと立てられており、実際の授業でも計画に従って進められている。最後の総括の部分もまとまっている。

B : 練習計画上の項目は押さえられているが、羅列的で、グループの現状把握が甘い。ポイントの整理がもう少し必要。修正や追加などのアドバイスは教官が行うが、自分のものとして理解されていない面もあってか、実際に授業で進めるときもスムーズに行かない点が散見される。

C : とりあえず、順番が回ってきたので、計画を立てたという感じのもの。

3 . 小レポート

年間を通して、適宜、技術に関する小レポートを課している (3 ~ 4 回) 。

テーマは、フォアとバックのストローク、ボレー、サーブ、ダブルスのポジション、等
課題は、各技術のポイントを参考文献にあたって自分なりにまとめること、自分の技術の習熟状況 (経験者は、初心者の習熟状況) の分析、今後の課題、練習に組み入れる点、等。

A : ポイントも整理され、習熟状況に関する分析も比較的十分になされている。

B : 上記 A と比べると、ポイントを押さえる点や分析が弱い。

C : 課題として出されたので提出しました、という感じのもの。

4 . 最終レポート

主要テーマは、「1年間の経験をふまえて、初心者・初級者がテニスを楽しむために必要な技術を獲得するための技術上のポイントをまとめ、練習計画を自分なりに立案せよ」。

その他、グループ別の授業運営、グループノート、施設設備への意見、等、何点かを課している。

A : ポイントが整理され、自分の経験 (ないしは、同じグループの初心者指導) を通して、練習上の課題がまとめられている。

B : まとまっているとも言えるが、上記 A よりは見劣りがする。

C : 実技で 1 単位だけど、必修だし、出さないと単位がもらえないので出したという感じのもの。

以上をどのように「総合」して評価するのかについては、

指標	1	2	3	4	最終評価
A	A	A	A	A	A
B	A	A	A	A	A
B	B	B	B	B	B

などのような感じ。

これまでの経験からすると、おおむね、最終評価が A の学生は各指標での A を過半数以上採るし、B の学生はほとんどが B レベルということが多いと思われる。ただし、たとえば、「B - B - A - A」「A - B - B - A」「A - A - B - B」と各指標が並んだとき、最終評価が A となるか B となるかは、ケースバイケース。その意味で、あまり厳密でない部分があることも否定できない。

しかし、1年間を通して、学生の顔と名前が一致することはもちろん、技術上の癖なり、グループにおける役割や位置などの授業中の行動についてもおおむね把握しているつもりなので、そうした点を含めて「総合的に」評価していると思っている（学生が質問に来れば説明は十分にできるつもり。「説得より納得」だが・・・）。

自分が考えている評価上の課題は、これまでの評価指標・基準からすると、技術面の向上という点と技術の到達度の評価という点とを、どのようにバランスをとって整理していくべきか明確になっていない点である。単純化していえば、技術の到達度だけでは経験者に有利であるし、向上の度合いを強調すると経験者の場合（初心者と比べれば）「向上する割合」は小さくなる、という問題である。

・今年度の成績評価はどのようにする予定ですか。

現段階では未定。

考えているのは、Aの部分で、「S」と「A」に分割すること。

5段階評価に読み替えると、

「S」= A 「A」= B 「B」= C 「C」= D

ただし、ここまで単純化していいのか？

・ガイダンスにおいて、学生にはどのように説明されましたか。

上記1)の各指標について説明（授業の目標や全体的な年間計画等をまとめた配布レジユメの1項目に掲げてある）。

第2部 討論

1. 論はじめに、各人から3分ずつ簡単に補足説明をもらってから、討論を行った。

2. 論点

目標と評価は関連する。評価項目は目標項目に対応している。その場合、それぞれの授業で、あるいは運動文化科目（特に、スポーツ方法、 ）で、いかなる目標内容を掲げているかが問題となる。講義要綱における目的として、次の2点をあげている。

・基礎的な体力の育成

・スポーツを行い、楽しむ上での基礎的能力（技術認識、練習方法、技術習得など）の養成

しかし、これには次の内容が不足しているとの指摘もあった。つまり、

・集団（グループ）形成、と言う視点である。多くの人が、グループなり班の形成には多くの配慮とエネルギーを割いている。

以上の点から、スポーツ方法の目標として、「出席数」「技術習得」「技術認識」「集団形成」そして「体力促進」等の内容が上げられる。以上のような内容を目標として提起し、具体的な授業を行っている。そして評価もその目標に沿って行なおうとしている。しかし、

評価基準設定の困難性。「何がどこまで到達したかを、何をもって証明するのか」という評価規準の設定の課題が立ちふさがる。この点で、出席数や基礎技術の習得は比較的可能である。例えば、技術習得も個人種目では比較的容易だが、集団種目での連係プレーや、先述などが絡んだ技術の習得の評価になると、困難さは増加する。そして、集団（グループ）的目標は最も困難な基準の1つである。多大なエネルギーを投入している

割には、何をもって集団関係が促進されたかは、判断しにくい。このように、内容として点数化し易いものと、し難いものがあり、前者では今後各人が明記することが求められる。後者は、今後の研究課題として実践交流が一層必要である。これらは教育学では一般的に目的と目標と規定しており、運動文化科目においてもその識別が必要であろう。

種目あるいは教場の条件によって、グループ指導の困難な場合もあるとの指摘もあり、この場合には目的としてもあまり強調されることはない。

「C」の合格ラインとして、共通基準は何か。これには2つのレベルが考えられる。1つは での目標で掲げた5つの項目のそれぞれに「C」ラインの内容が問われている。そして第2はそれぞれを総合して、教科全体としての「C」ラインの設定である。これらは、今後の実践報告の数多い蓄積を通してゆくしかないのではないかと。

統一基準は不要。以上のような目標観、評価観が交流されたが、現状では個々人の基準をより明確にする必要性の段階であり、エリアとしての統一基準を設定する必要はないということになった。

上記の課題を今後検討する。 (内海和雄)

(2) 学生はどのようなスポーツ方法 の授業を求めているのか

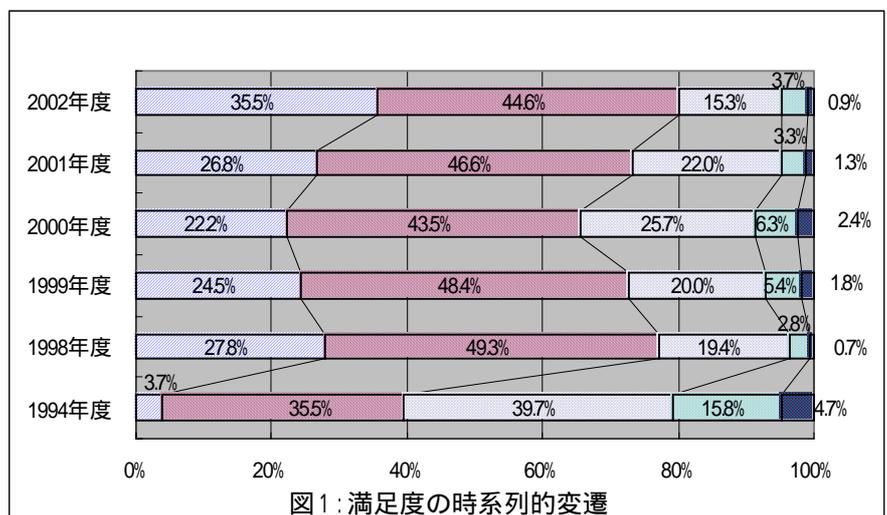
「スポーツ方法アンケート」と「授業評価アンケート」を手がかりに

(2003年10月21日 教育部提案)

2003年度の2回目の実践交流会では、教育部から「学生はどのようなスポーツ方法 の授業を求めているのか」というテーマでの報告を行った。これまでわれわれが行ってきた実践交流会は、全学FDに対し、運動文化エリア内のFDであるといえるが、本報告は両者を積極的に連携させようとする試みである。報告の内容は、毎年われわれが独自に行っている「スポーツ方法アンケート」と今年度から本格実施となった「全学授業評価アンケート」の結果を分析し、そこから読みとれる学生が求める「スポーツ方法」の授業像を抽出しようというものである。また、「全学授業評価アンケート」の導入によって、われわれの知りたいことがらが把握できるようになっているのかということもここで検討し、そうでないならば、どのような質問の仕方をすればよいのか、代替案などの提出もここでの課題とした。

1. スポーツ方法の授業への満足度

例年、「スポーツ方法アンケート(スポーツ方法の受講者対象)」では、「スポーツ方法」



に対する受講希望を訊ねると同時に、「授業全体への満足度」を5段階で質問している（巻末資料@参照）。右図に示したように、「四年一貫教育」導入以降（1997年度～）「たいへん満足」「まあ満足」と答える者の比率は常に高い値を示しているが、特に2000年度からの三年間で、劇的に満足度が高くなっていることが分かる。そして、2002年度には80%以上の受講生が「たいへん満足」または「まあ満足」と回答している。他方、不満を訴える学生は年々減少してきている。

1000人以上の受講生がある授業科目群で、これだけの満足度を示すものは、他にはないであろう。そして、何よりも、年々満足度が高くなっているという事実は、われわれ一人ひとりの授業改善への努力が授業に反映されているということの証左として、ひとまずは慶賀すべきであろう。その上で、どのような改善点がこのような満足度に反映されているのかを問わねばならないであろう。

2. 満足度・不満度の内容

【種目別満足度・不満度】

2002年度に実施した「スポーツ方法アンケート」の満足度（「たいへん満足」＋「まあ満足」）と不満度（「やや不満」＋「たいへん不満」）を種目別にみると、種目ごとにバラバラな値を示しているが、複数開講であるにも関わらず、テニス（8コマ）、バドミントン（4コマ）、バスケットボール（2コマ）が平均よりも高い満足度を得ている（表1参照）。また、中でもバドミントンとテニスには、95%を超える満足度を得ている授業も存在する。

同一種目で開講しても、担当者によって満足度に大きな差が生じているものもある。今後は、アンケート調査を工夫し、受講生の「満足」の内容の検討をより詳細に行う必要があるであろう。また、研究授業や実践報告などによって、お互いに、授業運営方法や教授法をブラッシュ・アップしていくことも望まれる。

表1：種目別満足度と不満度

種目	満足度	不満度
スポーツフィットネス	51.5	27.3
ソフトボール平均	75.1	9.5
フライングディスク	65.6	12.5
バスケットボールの平均	80.4	6.5
テニスの平均	81.9	3.1
バレーボールの平均	77.1	4.0
剣道	86.2	6.9
バドミントンの平均	92.1	0.9
サッカーの平均	74.9	1.3
フラッグフットボール	100.0	0.0
ジャズダンス	94.4	0.0
軟式野球の平均	61.1	0.0
全体の平均	80.1	4.6

【開講時限別満足度・不満度】

開講時限別に満足度と不満度をみると、時間が下がるにしたがって満足度が高くなり、不満度が低くなるという傾向にある（表2参照）。しかし1限開講の授業であっても、非常に高い満足度のものもあり、開講時間と満足度の関係は一概には言えないと考えられる。

表2:開講時間別満足度と不満度

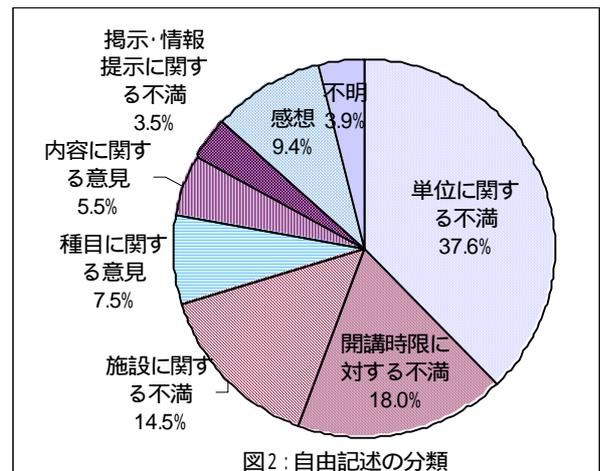
	満足度	不満度
1限授業の平均	75.8	6.7
2限授業の平均	80.9	2.0
3限授業の平均	82.9	2.6
全 体	80.1	4.6

アンケートの自由記述の欄には、1限目に開講することへの不満や、午前中に開講時間がまとまっていることに対する不満が散見されるが、現在の施設条件では、午前中に集中して開講せざるを得ない。1時限目からの授業に不満を抱く受講生には、常にわれわれが施設条件の改善のための要求を出し、午後を開講できる種目を増やす為の努力をしていることを説明しなければならないであろう。

【自由記述にみられる満足・不満の内容】

「スポーツ方法アンケート」の自由記述の欄には、受講生の不満、意見、感想が表明されている。2002年度の自由記述255件を分類すると、「単位に関する不満」が一番多く37.6%、

次いで「開講時限に対する不満」18%、「施設に関する不満」14.5%、「開講種目に関する意見」7.5%、「内容に関する意見」5.5%、「掲示・情報提示に関する不満」3.5%と続く。「単位に関する不満」は、スポーツ方法の授業を半期2単位、通年4単位にして欲しいという希望の表明であり、開講時限に関する不満は、1限に開講することへの不満の表明である。また、施設に関しては、その大半がバレー・ボールの受講生からの屋外コートを使用することへの不満が占めている。「種目に関する意見」では、多種目化や半期ごとに種目を変える授業、開講種目以外の種目の希望などが意見として提出されている。「内容に関する意見」では、スポーツ方法の授業にレポートは不要だという意見が目立った。



これらの自由記述みられる意見や不満は、例年のアンケートに認められるものであり、その中で改善可能なものは、ひとつずつ対処している。今後も、多くの者が表明している意見に関しては、エリアとして取りくまなければならないであろう。また、それぞれの授業特有の意見については授業担当者に還元し、授業改善に役立ててもらうことが期待される。

3. 「全学授業評価アンケート」は正当にスポーツ方法の授業を評価しているのか

授業評価アンケートは講義形式の科目を前提に作成されている。はたして、それをそのまま実技科目である「スポーツ方法」の授業を評価する質問紙へと適応してもよいもので

あろうかという点が今回の検討事項であった。項目によっては、スポーツ方法の授業へとダイレクトに転用可能なものも含まれるが、他の講義系科目と異なるために補足説明が必要な項目もあると考えられる。たとえば、「Q6.教材、器具の効果」で想定されている「教材、器具」は講義科目（プリント、プロジェクター、パソコン）とスポーツ方法の授業（スポーツ種目自体、スポーツ器具、施設・設備）では明確に異なるであろう。また、スポーツ方法で習得する「Q10.理論・思考」とはどのようなものを指すのか。同様に「Q11.問題意識や関心」とは何か。この点を受講生の解釈だけにゆだねるような聞き方をしているだけでは不十分であろう。

しかしながら、現段階としては、アンケートを複雑化して受講生に混乱を生じさせるよりは、「スポーツ方法アンケート」を利用したり、「全学授業評価アンケート」の教官独自に設定できる項目にエリア全体で聞く項目を設けたりなどして対応するべきであろうという点で意見が一致した。

また、「これまでのスポーツ方法アンケートでは、満足度を量的に把握するのみにとどまるので、今後は満足・不満足の本質を聞くべきだ」という意見が出された。さらに、「全学授業評価アンケート」の教官独自の質問に対しても、スポーツ方法の授業目標に合致するような項目の設定が望まれるとの見解が提出された。それを受けて、運動文化科では、今年度冬学期末から、改良した「スポーツ方法アンケート」と独自の質問を加えた「全学授業評価アンケート」を実施することにした（巻末資料@参照）。

（岡本純也）

2. 教育活動日誌

2003/04/07 新年度顔合わせ会

04/22 教育部会（今年度の教育活動方針と年間計画、スポーツ方法の抽選結果）

05/07 教育部会（小平体育館調査、実践交流会について）

05/20 実践交流会（新成績評価方法の検討：岡本純也）

06/10 教育部会（スポーツ方法の目標と授業評価基準について）

07/22 教育部会（スポーツ方法の成績評価のガイドライン）

09/30 教育部会（来年度カリキュラム、施設条件、実践交流会について）

10/21 実践交流会（学生の授業評価）

10/28 教育部会（来年度カリキュラム、非常勤財源について）

11/11 課外活動との施設利用調整会議

11/18 教育部会（来年度カリキュラム、成績評価方法について、施設関連）

12/09 教育部会（授業評価アンケート独自項目、スポーツ方法アンケートについて、予算）

2004/01/29 教育部会（アンケート：学生・教官、総括と方針、講義要綱：受講にあたって）

02/24 教育活動の総括と方針 - 1

03/09 教育活動の総括と方針 - 2

3. 調査活動

今年度もスポーツ方法の受講生に対して、アンケートを実施した。方法 は冬学期末、方法 については夏・冬の学期末に行った。また、今年度は、冬学期に実施した分については、満足・不満足により具体的な内容を記入してもらえるように設問を部分的に変更した（巻末資料参照）。夏学期の方法 については昨年度から変更はない。

1. スポーツ方法に関するアンケート

- ・対象：スポーツ方法 の受講生
- ・実施期間：2004年1月の各授業時間内
- ・有効回答数：783人（登録者数1108人）

（1）満足度

本年度は、昨年度に比べ「たいへん満足」が24.2%と11.3%減少し、「まあ満足」の48.4%（昨年度より3.8%上昇）とあわせると、72.6%が「満足」であると答えている。2000年度からあった上昇傾向が減少したことになるが、7割以上が「満足」としており、例年どおり高い満足度を示しているといえる。

種目別にみると、「たいへん満足」が多いのはフラッグフットボール（45.5%）、バスケットボール（42.6%）、ジャズダンス（34.5%）であるが、「まあ満足」をあわせた満足群でみると、フラッグフットボールの90.9%、ソフトボール90.6（「まあ満足」71.9%）が群を抜いている。しかしながら、最も低い値のスポーツフィットネスで58.3%とすべての種目でほぼ6割以上が満足と答えている。

では、どのような点に「満足・不満足」を感じているのだろうか。今年度から「満足・不満足」な点について個別に自由記述欄をもうけたが、その内容から、満足度が高いと答えた群では「満足した点」について、「運動不足が解消される」「基礎から教わってよかった」「試合がたくさんできた」など運動、技術向上に関すること、「友人ができた」などコミュニケーションに関することなどがあげられていた。また、満足度の低い群（「たいへん不満」2.0%、「やや不満」3.6%）では「不満な点」として、「更衣室の狭さ」「屋外バレーボール」「雨天時の授業」など施設・設備に関すること、「単位が少ない」「一限がづらい」「レベル別の練習がしたかった」などがあげられている。しかし、それらの指摘は満足群でも多くみられるものである（時限別にみても、昨年と同様、大きな偏りはみられない）。また、不満群でも「満足した点」に「楽しかった」「仲間（ができたこと）」「スポーツをする機会を与えられた」など、満足群と同様な記述がみられる。このような自由記述からみても、授業に対する満足・不満足は、一面的なものではなく、どのような要因がみられるかについては、今後も多角的な分析が必要であろう。

（2）方法 の履修希望に関して

次年度方法 を履修するか否かについての質問では、10.0%が「ぜひ履修したい」と答えているが、この割合は2000年度以降ほぼ横ばい状態である（昨年度10.3%）。これは、「時間帯があえば」26.4%（同28.6%）、「やりたい種目があれば」15.3%（同16.4%）と同様の傾向で

ある。

満足度別にみると、「たいへん満足」と答えた群から履修希望は多いが、「やや不満」「たいへん不満」の不満足群でも3割が履修希望を示しており、潜在的な方法の履修希望は多いといえるだろう。

(3) 方法の非履修の理由に関して

他方で、今年度は「履修しない」と答えた受講生が34.2%とやや上昇した(昨年度30.7%)。その理由としては自由記述にもみられるように、単位に関する不満が群を抜いている。「方法の履修非希望の理由」(複数回答)でもっとも多い答えは「単位数が少ない」56.3%(昨年度は58.7%)、「ほかの科目を優先」52.1%(同41.7%)であり、この傾向も例年と変わらないものである。

また、自由記述にも履修しない理由として、「部とかでやってないとAがとれなさそうだから」「スポ2をとる人は技術が高い人ばかりで楽しんでやれない気がする」といった記述があり、方法への「気後れ」もみられるのも昨年と同様である。

(4) スポーツ方法の授業に対する要望・意見

本年度は、より具体的に「満足した点」「不満な点」「希望」のそれぞれを個別に書いてもらった。「満足した点」「不満な点」については既述したが、「希望」についても「単位増」への要望、「二限以降の開講」などについては抜きん出て多かった。また、時間割に関しては、「不満な点」でも同様にみられるが、他の必修科目との重複についての記述がみられる。希望する種目がとれなかった、抽選で落ちたためモチベーションが下がったなどの記述もみられる。時間割に関しては全学的な問題とも関係するために、運動文化単独では解決しえない問題ではあるが、授業の進行を大きく妨げる要因となるようであれば、今後何らかの対策を考えていく必要もでてくるだろう。

また、施設・設備に関する要望も多くみられた。ここでも、例年どおり屋外バレーボールに関する意見が多くみられた。バレーボールは室内で行うものという固定観念が、不満となって現れていると考えられるが、ただ、それも満足度とストレートに結びつくものではなく(満足度は11種目中6位である)屋外で楽しむバレーボールという授業の目標を学生に認知させることで克服できる問題でもあろう。しかしながら、それ以外の屋外種目に関しても雨天時の代替授業への不満は、多くは設備(屋内体育館・施設の不備、教室の確保、AV機器、ビデオ教材等)への不満となってあらわれており、体育施設の整備、AV機材、資料等の整備は不可欠であるといえよう。

2. スポーツ方法に関するアンケート

- ・対象：スポーツ方法の受講生
- ・実施期間：夏学期 2003年7月、冬学期 2004年1月の各授業時間内
- ・有効回答数：夏169人、冬162人、計331人
(登録者数：夏263人、冬312人、計575人)

(1) 満足度

スポーツ方法 の満足度は、例年高い数値を示している。本年度も夏学期「たいへん満足」59.2%、「まあ満足」34.3%、冬学期「たいへん満足」64.2%、「まあ満足」31.5%と、どちらも9割以上が満足と答えている。本年度は、冬学期のアンケートで、方法 の受講理由(複数回答)を項目別に選択してもらった。それによると、最も多かったのは「実施する種目が好きだ(やってみたかった)から」で82.7%であり、次に「健康・体力を維持・向上するため」51.2%となっている。ここでは、運動それ自体、あるいは種目の特性に大きく関わった回答が得られた(夏学期の自由既述でも同様な傾向が見られるたとえば「サッカーが好きだから」「運動不足解消」等)。他方で、結果としての満足度は自由記述にみることができるが、「アタックができるようになった」(夏・バレー)や「ボールに当たるようになり、ゴルフの楽しさが少しわかったのでよかった」といった技術的側面について満足した記述がある反面、「半期では短い」「レベルがやや低い」といった感想もみられた。さらに、「色々な人がいて楽しい、うまい人から学べる」「友達がたくさんできた」といった感想もみられ、「受講理由」では22.8%と三番目だった「親しい仲間をつくるため」のようなコミュニケーションに関して、結果として満足が得られていることが読み取れる。

(2) 履修希望

方法 の履修希望に関しても、高い数値が認められる。「ぜひ履修したい」と答えた学生は夏59.3%、冬44.4%となっている(冬学期に低くなるのは、4年生が多く「来年度は卒業している」が増えるためであると考えられる)。「時間帯があれば」は両学期とも20%台であり、「やりたい種目があれば」をあわせると、方法 を受講しているほぼすべての学生が次年度の受講を考えていることがわかる。

(3) 方法 への要望・意見

方法 においても単位の増加は要望として大きな割合を占めている。施設に関しても、「コート数の増加」(テニス)、バレーボールの屋内実施、グラウンド整備(サッカー)などがあげられている。方法 以上にモチベーションの高い学生が集まっていることから、「チームを分けるなり、工夫してほしい」「勝敗表を正確につけたらおもしろかったと思う」等、具体的な提言もみられる。上記でみたように方法 では、授業というより種目自体への関心が大きく、また「リピーター」が多ため「慣れ」もみられるが、そのような学生をいかにして授業へと関与させるのかかが、方法 の「満足度」をより充実させるための課題となるといえるだろう。

(坂 なつこ)

4. 教育部の活動・体制

本年度の教育部の活動・体制を以下に示す。

- ・ 日常的な教育活動の運営に必要な基本的業務の遂行
- ・ 2003年度のカリキュラムの編成
- ・ 部会の開催 = 9回
- ・ 実践交流会の開催 = 2回

- ・ 課外活動との運動施設調整会議（副学長主催）への参加
- ・ 学務課や施設課など、学内関係部局との国立キャンパスの運動施設・関連施設の整備・建設についての話し合い
- ・ スポーツ方法 ・ の受講生に対する受講状況調査
- ・ 全学 FD への参加
- ・ 「われわれの教育活動 - 総括と方針 - 」の刊行

本年度の体制は岡本（部長）、内海、坂、渡辺（庶務）であった。

（岡本純也）

． 2004年度教育活動の方針

1． 2004年度の基本方針

「われわれの教育活動をめぐる状況」でも記したように、「法人化」1年目の今年度は、諸改革が具体化される年になるであろう。その動向を見極めつつ、われわれは、教養教育の改善に努めなければならない。特に、「全学共通教育」の重点的検討が開始される予定であるので、以下の点を今年度の重要な方針として掲げたい。

第一に、「全学共通教育」の定義も含めた枠組み作りの議論に積極的に参加し、運動文化教育のこれまでの蓄積と固有性を活かした教養教育のカリキュラムづくりを目指す。

そのために、第二に、「四年一貫教育」以降のわれわれの教育を振り返り、これまでの成果と課題を明確にする。

第三に、非常勤の財源問題をきっかけとした教養教育のコマ数の見直しについては、トップダウン式の決め方を警戒し、ボトムアップの議論によってこれを遂行するようにする。

しかしながら、第四として、そのことにより新たなる試みに対して消極的になるのではなく、今後の教養教育の行く末を見通して実験的な授業を奨励する。

さらに、運動文化科目の改善を目指し、以下の項目を方針としたい。

全学授業評価とスポーツ方法アンケートを利用し、学生の要求や意見、授業評価をふまえたカリキュラム編成、教育方法・内容の充実を心がける。

授業評価および成績評価を検討し、われわれ独自の授業評価、成績評価・試験体制の充実、開発につとめる。

「スポーツ方法」の単位数に対する学生の不満の解消に向け、半期2単位化の方向性を模索する。

これまで十分に議論がなされてこなかった、スポーツ科学・健康科学の科目構成や内容の検討を行い、体系的なカリキュラムづくりを目指す。

多人数講義については開講曜日・時限の変更など、その改善策を検討する。

柔軟かつ多様なカリキュラムの編成という点で、そしてまた、天候に影響されない日常の授業実践の安定的な実施という点で、体育施設の整備・拡充について大学執行部との交渉を含め、長期的な視野に立って事態の改善に努力する。

実践交流会、および、教育活動の総括と方針作り、冊子『われわれの教育活動』の充実に努める。

2. 教育活動

(1) 2004年度のカリキュラム編成と体制

< 開講コマ >

	2004年度		2003年度	
総開講コマ数	69.5	通年コマ	73.5	通年コマ
教養教育開講コマ	48.5	通年コマ	50.5	通年コマ
・方法 (療育コース)	31	(1)通年コマ	32	(1)通年コマ
・方法	25	半年コマ	24	半年コマ
・健康・スポーツ科学	6	半年コマ	8	半年コマ
・教養ゼミ	4	半年コマ	5	半年コマ
学部教育・大学院コマ	21	通年コマ	23	通年コマ
・学部講義	4	半年コマ	4	半年コマ
・学部ゼミ	11	通年コマ	11	通年コマ
・大学院講義	4	半年コマ	6	半年コマ
・大学院ゼミ	6	通年コマ	7	通年コマ

< 体制 >

- ・ 坂が在外研修に従事することになった。
- ・ 非常勤講師は10名。担当コマ総数は26.5(昨年度は10名、26.5コマ)。運動文化科目開講コマ数(教養ゼミ含む)に占める非常勤担当コマの割合は約54.6パーセントである(昨年度は、52.5パーセント)。
- ・ 体育館・コート整備作業員は引き続き、外部委託とする。
- ・ 研究部と教育部の担当助手の交代により、研究部：渡辺と教育部：関根の体制となる。

< 種目別2004年度開講コマ数 >

	スポーツ方法 = 通年		スポーツ方法 = 半年	
	2004年度	(2003年度)	2004年度	(2003年度)
テニス	9	9	7	7
バスケットボール	1	2	2	2
バドミントン	5	3	2	3
サッカー	5	6	3	2
バレーボール	3	4	1	1
軟式野球	1	1	1	-
ソフトボール	1	1	0	-
卓球	-	0	1	1
ジャズダンス	1	1	2	2
フライングディスク	1	1	2	2

スポーツフィットネス	1	1	-	-
剣道	1	1	-	-
フラッグフットボール	1	1	-	-
陸上	-	-	0	1
器械体操	-	-	1	1
ゴルフ	-	-	2	2
ヨガ	-	-	1	-
療育コース	1	1	-	-
合計	31	32	25	24

< 2004年度の特徴 >

- ・ 坂の在外研修従事と上野の在外研修からの復帰にともない、バスケットボールとバドミントン、サッカーの開講コマの間で調整をはかった。
- ・ 施設条件により、スポーツ方法 の屋外バレーボールを1コマ減じ、バドミントンを1コマ加えた。
- ・ 受講希望者の数を考慮し、内海の担当するスポーツ方法 の陸上競技を軟式野球へと変更した。
- ・ 浦田一郎氏が法学研究科長の任期を終了し、スポーツ方法 のヨガ担当に復帰する。

(2) カリキュラム、および教育内容・方法の充実

「スポーツ方法 」については、必修であることの意義を再確認し、

- ・ 授業ノートや授業間大会の企画などを通して学生が授業に能動的に参加できる「仕掛け」を工夫する。
- ・ 成績の評価基準について継続的に検討し、スポーツ方法に共通する基準を模索する。
- ・ 班対抗の試合やゲーム、発表会などが授業の全体的、通年的展開のなかで果たす役割、受講者の能動性やコミュニケーション、大学生活に及ぼす影響について多面的に考察し、授業の改善に役立てる。
- ・ グループ学習を採る場合、異質集団と同質集団では、教育効果や学習の深度にどのような違いがあるのかを検討する。
- ・ 雨天時の円滑な授業運営に努める。
- ・ 遅刻者や欠席者に対する指導に留意し、長期欠席者のケアに努める。

「スポーツ方法 」については、

- ・ 学生の満足・不満の内容を検討し、さらなる授業の質の向上を目指す。
- ・ 各自の実践的課題を明確にするとともに、特徴ある授業実践や実験的授業実践を奨励する。たとえば、演習化などの方策を探る。
- ・ 雨天時の授業実践などに関して交流を深める。
- ・ 学生の多様なスポーツ要求に応えうるカリキュラムの編成に留意する。

「スポーツ科学・健康科学」については、

- ・ 授業間の関連性について検討を行い、連携した教育カリキュラムの実現化を目指す。

- ・ 多人数講義は開講曜日・開講時限の変更なども含め、その是正について検討し、その運営をサポートする体制を整える。
- 「教養ゼミ」については、
- ・ 交流に努め、優秀なレポートについては雑誌『一橋』への教官推薦を勧める。
- ・ レポート集などを作成した場合は、1部を運動文化科に寄贈し、成果の蓄積がなされるようにする。

3. 教育条件の整備・拡充

教育条件の整備・拡充に関する事項としては以下のものがある（すでに学内の関係各部所との話し合いが進んでいるものも含まれている）。

新体育館の改修・プールの建設

- ・ 当面は概算要求項目への確固たる位置づけを図る
- 現体育館（ が実現されるまで）
- ・ 日常的なメンテナンス
 - ・ 新部室建設による日陰対策（＝館内照明の改善）
 - ・ 窓ガラスの補強・強度化

新体育館予定地の用途変更

- ・ 多目的グラウンドの設置（整地、フェンス等）

軟式テニスコート、新テニスコート

- ・ 軟式テニスコートのオムニ化
- ・ 軟式コートと新コート間の緩衝地帯への芝生植え（水はけ悪く、ローラーかけもできない部分なので）

バレーボールコート

- ・ バレーボールコート専用の倉庫の設置
- ・ 体育館の日陰対策
- ・ グラウンド面のオムニ化と水はけ対策

陸上競技場

- ・ トラックのタータン化
- ・ （タータン化実現までの）水はけ対策
- ・ フィールドの草刈り（6月初旬、9月下旬の2回）
- ・ フィールドの芝生の整備

野球場

- ・ フェンス沿いの草刈り
- ・ 外野部分の芝地の整備

西キャンパスの男女更衣室の管理

- ・ 授業に支障のないような維持管理

教材・教室利用設備の改善

- ・ 雨天時の教室の確保

- ・ A V 設備の整備・改善
- ・ 参考文献/参考ソフトなどの充実

4．運動施設利用に関する関係クラブ・サークルとの調整会議

例年どおり、次年度カリキュラム編成期に、学生部主催で関係クラブ・サークルとの調整を行う。形骸化させることなく、意見交流の場としても充実させる方向で取り組む。

5．カリキュラムの充実、教育方法改善のための調査・研究

例年の調査活動に加えて、それぞれの講義・授業担当者の授業評価アンケートの結果を検討し、運動文化科全体のカリキュラムおよび教育法改善のための資料とする。

6．教育部の活動

(1) 諸行事の開催

実践交流会の開催

- a.カリキュラム改革の動向把握と四年一貫教育の振り返り
- b.成績評価方法の検討 5段階評価の再検討
- c.実技科目におけるT Aの導入について

施設整備関係部署との交流会

新年度顔合わせ会

教育活動の年度末総括

(2) 調査活動

- ・ 「スポーツ方法」の満足度と「スポーツ方法」の受講希望調査(冬学期末)
- ・ スポーツ方法の満足度調査(夏・冬学期末)

(3) 資料・調査報告書・研究成果等の発行

- ・ 「われわれの教育活動」の刊行
- ・ 施設整備・改善のための基礎資料の作成

(4) 2004年度・教育部関係日程(案)

4月	5日(月)	新年度顔合わせ会
月	日()	実践交流会1
月	日()	実践交流会2
月	日()	実践交流会3
月	日()	教育活動の総括会議
月	日()	教育活動の方針検討
月	日()	年度末懇親会

われわれの教育活動

2003年度総括と2004年度方針

25

2004年4月5日発行

編集・発行 一橋大学スポーツ科学研究室 042-580-8270

運動文化教官室 042-580-8131

〒186-8601 国立市中2-1
